
リトルバスターズvs古河ペイカーズ

ゲキガンガー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ vs 古河ベイカーズ

【NZコード】

N7837M

【作者名】

ゲキガンガー

【あらすじ】

リトルバスターズと古河ベイカーズが闘うューストーリーです。

リトルバス SS

「理樹、次の試合が決まったぞ」

男子寮の一室。僕と真人の部屋に入ってきた恭助は開口一番そう言った。

「・・・試合?」

「勿論。俺達リトルバスターズの試合だ」

リトルバスターズとは幼馴染で結成した悪を滅ぼす正義の味方のこ

とだったが、

今は草野球チームのことである。前回の部長達のチームとの試合から一ヶ月、次の試合が決まったようだ。

「ふ。ついにこの俺の筋肉の出番のようだな」

部屋で筋トレをしていた真人は腕を組み、言った。

さつきまで筋トレをしていたからか、真人の体からは汗が流れ出している。

「それで恭助、どこのチームと試合するの?」

「それはまだ秘密だ」

「秘密?」

「ああ。だが、強敵であるのは間違いない」

「ふ。俺の筋肉の出番のようだな」

「理樹、他のメンバーにも伝えといてくれ。練習再開だ」

放課後、僕達リトルバスターズの面々はグラウンドに集った。

「というわけで、我々リトルバスターズの試合が決定した。試合は一週間後だ。

各人これまで以上に練習に励むよう

「に」

恭助はそれだけをメンバーに伝えた。

「・・・恭介さん」

美魚は落ち着いた口調で自分の発言権を求めた。

「どうした、西園？」

「肝心の相手チームのことを聞かされていません」

「・・・ああ。相手は隣町の草野球チームだ。なんでも隣町で無敗を誇り、あまりに強過ぎて試合相手に困っていたらしい」

恭助は手を前に翳しポーズを決めた。

「それで俺達リトルバスターズの出番というわけだ。その無敵のチームを破り、俺達が最強の座を手にする」

「ま。相手が誰でも俺がいる限り我がリトルバスターズに敗北はない」

腕にギプスをし、ジャンパーを着た謙吾は言い放った。いかにも謙悟らしい頼りになる台詞だ。

「そうそう。この筋肉がある限りうちに負けはないぜ」

真人が続いて言う。

「お前はせいぜい皆の足を引っ張らないように隅っこで筋トレでもしている」

謙吾は皮肉を込めた口調で言った。

「それはどういう意味だよ、げんこつち」

「言葉通りの意味だ」

「なんだよ。じゃあ、お前の筋肉は大きすぎでチームのお荷物だから、せいぜいでしゃばらないで隅で大人しく筋トレでもしていくください、とでも言つつもりか？」

「その通りだ」

二人は互いを睨み合う。

この二人の喧嘩は日常茶飯事だ。僕達が幼馴染になり、悪を滅ぼす正義の味方、リトルバスターズを結成してから、この一人はいつもいがみ合っていた。

二人は憎みあつてゐるわけではなく、ただ対抗心が強いだけなのだが。

「そこまでだ。二人達」

恭介が止めに入つた。

そう、この二人の喧嘩を止めるのは昔から、いつも恭介だった。

「ルールに則つてもらおつ」

僕達は恭介の提案により、いがみ合いをバトルランギング制という、それ自体を遊びにした。恭介が携帯でメールを打つと、二人の周りに野次馬が現れた。

その野次馬から、武器を投げ込んでもらい、無作為に手に取つた道具で闘おうというものだ。勝者は敗者に称号を与えることができる。

「こいつだ」

「こいつにするぜ」

野次馬から投げられた道具を、一人は手に取つた。

謙吾が手に取つたのは歯ブラシ。

真人が手に取つたのはティッシュペーパーの箱だ。

「毎回思うんだが、これでどうやって闘うの？」

真人は恭介に尋ねる。

「本来の使用方法で闘うこと」

恭介はそれだけを告げた。

「ふん。やるしかあるまい」

「ああ。やつてやるぜ」

謙吾の攻撃。

謙吾は勢い良く真人の歯を歯ブラシで磨き上げた。

真人の歯が綺麗になつた。

真人の攻撃。

「どういうか。これでどうやって攻撃するんだ？これつけて殴つていい？」

真人は恭介に尋ねる。

「駄目。本来の用法で闘うこと」

真人は謙吾の鼻にティッシュを当てる。謙吾は勢い良く鼻をかんだ。

謙吾はすつきりした。

お互い決定打のないまま、時間ばかりが過ぎた。

「タイムアップ。引き分けだ」

恭介はそう告げた。

「ち。命拾いしたな」

「お前こそ、な」

まあ、お互い怪我がなくてよかつたよね。

僕はそう思った。

僕達は練習を始めた。僕はバッター・ボックスに入る。

マウンドに立つのはピッチャーの鈴。その後ろには無数の猫。

「理樹、行くぞ」

マウンドの鈴は振りかぶった。

「いいよ。鈴」

僕はバットを構えた。

「行くぞ」

鈴は高く足を上げ、

「真ライジング・ヤットボール」

球を投げた。

練習の小休憩、女性陣が集まっている。

女性陣の会話が聞こえてきた。

「来ヶ谷さん」

「どうした。美魚君」

「来ヶ谷さんは恋をどう考えられますか?」

「どう美魚が切り出した。」

「いつもやつだが、唐突だな。君は」
「来ヶ谷さんほどではありません」

多少引っ掛かる所があつたようだが、来ヶ谷は話を続ける。

「美魚君は恋をしているのか？」

「いえ。ただ、そういう物事に興味があるだけです」

「恋つて英語でなんて言つんでしょうねえ。やつぱりloveでしょうか」

クドが疑問符を浮かべる。

「いじ？ああ。あれな。あれはつまいまいな。猫も好きだぞ」

肩に乗せた猫をいじりながら、鈴。

「鈴ちゃん違うよお～それは魚だよ～」

と、小毬。

「じゃあ、恋つてなんだ？」

「う、うーん口で説明するのは難しいね。・・・よつは、相手の人のことが好きつてことかな」

「あたしは千毬ちゃんの」と好きだぞ。じゃあ、これは恋だな

「それは違つよお～」

「違わないと思います」

美魚は小毬が否定するとそれを強く否定した。普段美魚が取らない態度に一瞬場が止まる。

「いえ…。同性でも恋はするものだと」

「まあやうですね。あたしも姉御にドキドキさせられる」とあるし

と、葉留佳。

「ほつ。それはどういう時だ？」

「」の前姉御のティーセット壊した時なんて心臓がドキドキ。ほんとバレなくて良かつた

「やはり貴様か」

「はつ」

突如気付いた。

「なにいつてんですか、姉御。あたしがそんなことするわけ

「問答無用」

「ぎこやああああ

稻妻のような衝撃の元、葉留佳は彼方へ吹き飛んだ。

「思うに美魚君。恋とこつのはそれをしている本人にしかわからぬ
いものだと思うぞ」

「まあ……そうですね」

美魚は皆に向き直り。

「皆さんには想いを馳せている殿方はいらっしゃるのですか?
想いを馳せる? それはどういう意味だ?」

首を傾げながら、鈴。

「気になるやつはいるか? といつ意味だよ。鈴君」
来ヶ谷は説明した。

「あーあれな……あたしはこるが
「どのような方ですか?」

美魚は尋ねた。

「頼りない奴だ」

鈴は腕を組みきつぱりと言い放つ。

「だが、あたしの手伝いをしてくれたり、頼りになるところもある。
なかなか良い奴だ。小毬ちゃんはどうなんだ?」

「ふえ? 私? えーと、私はね。一緒に屋上でお菓子を食べてくれる、
優しい人かな

「屋上?」

「な! なんでもない。なんでも」

一同の疑問を小毬は打ち消す。

「来ヶ谷はどうなんだ?」

「私が……まあ、弟みたいな奴だ。放つておけない」

「クドはどうなんだ？」

「私ですか！…そーですねえ。一緒にテスト勉強をしてくれる人ですかねえ」

「私は？私は？」

さつき吹き飛んだ葉留香だが、いつの間にか戻っていた。

「なんだ葉留佳。生きてたのか」

「私はですね。私と手をつないで風紀委員から逃げてくれる人ですね」

「なんだか、皆さん同じ人物を指しているような気がします」

美魚はそう評した。

皆が誰の話をしているか、僕にはよくわからなかつたが、微笑まい状況だと思った。

その後も皆良よく練習した。

「恭介は好きな人とか、いないの？」

僕は恭介にそう訊いた。昔からそうだが、恭介はモテた。そのルックスの良さから、上級生、下級生問わず、告白された回数は数え切れない。だが、特定の女性と付き合つたという話を聞いたことがなかつた。

「どうしたんだ、理樹。急にそんなこと訊いて」

「……うん。さつき女の子達がそういう話をしていたから。それで

……」

「どうしたんだ、理樹。急にそんなこと訊いて」

恭介は感慨深げに言った。

「……好きな奴か。ああ。いるよ」

恭介に好きな人がいるなんて初耳だつた。
不羨だとは思つたが僕は訊いてみた。

「どんな人？」

「理樹……お前だ」

「え？」

まるで体中の血液が顔目掛けて逆流してきたかのように、僕の顔は耳まで真っ赤になつた。

「なにいつてるんだ恭介、た、たしかに、僕も恭介のこと好きだけど、僕達、その友達だし、その、それ以前に僕達は、その、あの男だし……けど、恭介なら……」

「お前だけじゃない。謙吾も真人も鈴も、俺はリトルバスターズの皆が好きなんだ」

恭介は構わぬ、続けた。

「なんだ、そういうことか。

つて何僕はがつかりしているんだ。ああ。もう。

僕はがむしやらに髪をかきむしつた。

「直枝さん」

僕は恭介と別れてから、美魚に呼び止められた。

「恋に性別は関係ないと私は思いますよ」

美魚はそれだけを告げ、踵を返した。

「恭介の好きな奴？」

謙吾は首を傾げた。

「うん。恭介に訊いたんだけど、はぐらかされた

僕は謙吾と真人に訊いてみた。

「案外、筋肉関係じやねえか」

真人は言った。

「それは流石に真人だけだよ」

僕は嘆息した。

「さあな。小学生の頃から俺達は一緒にいたが、そういう話は聞いたことがないな」

と、謙吾。

「謙吾は、よく告白されたりしたよね。誰か気になつたり、付き合つたりしてみよつと思つたことはないの?」

僕は謙吾に尋ねた。

「まあ、俺は剣道一筋だったからな」

「俺も筋肉一筋だったからな」

真人は謙吾に続いて言った。

「そもそも真人は告白されたことないでしょ」

僕はそう指摘した。

「……俺だって、告白されたことの一回や二回……」

真人は指を折り数え、

「うおおおおおねええええ」

突如気づいたように叫んだ。

「理樹、理樹は告白されたことあるのか?」

真人は慌てたように僕に尋ねる。

「え、ああ。前に一回だけ」

「うおおおおお。俺の筋肉が足らなかつたつていうのかよおおお」

真人は叫ぶ。

むしろその筋肉が足りすぎているのが問題だと思うんだけど。

「なにやつてんだおまえ等?」

そこで鈴がこちらにやつてきた。

「頼む! 鈴。俺に告つてくれ」

真人は鈴の肩を掴み、懇願した。

次の瞬間。

鈴のハイキックが絶妙な角度で真人の首に炸裂した。

「馬鹿冗貴の好きな奴?」

鈴は首を傾げる。

「ああ。恭介が誰のこと好きだか、知りたいんだけど友人の僕達にはわからなくても、妹の鈴にならわかるかもしれないと思い、僕は鈴に訊いてみた。

「うーむ。きょーすけの好きな奴か」

鈴はしばし腕を組み、悩み。

「いないんじゃないかな？」

そう、答えた。

「奴はもつと別のこと興味を持つているような気がする」

「……そうか。ありがと。鈴」

僕に答えた答えは、別にはぐらかしたわけじゃなく、本心からそういう思つていたような気がした。

その後も、僕達はよく練習した。

そして、一週間後。

試合当日。

早朝。僕達は隣町の学校のグラウンドに集合した。桜並木を通り、坂を上った所に、相手の学校があつた。

「ついにこの時が来たか」

恭介は感嘆とし、そう呟いた。

「ああ。俺の筋肉もさつきからうなりっぱなしだぜ」

「わふー広いグラウンドです」

各人は各自の胸中を口にする。

僕達の目の前には整理されたグラウンドが広がっていた。

天候も良く、絶好の試合日和である。

既に相手チームはウォーミングアップを始めているようだ。この対側のダイヤモンドの上では白球が飛び交っている。ここからでは遠くで良くわからないが相手の体格は僕達とあまり変

わらないうつに見える。無敗のチームと聞いていたので、もっと大柄のチームを想像していた。

「はーい。彼女達」

この学校の生徒だろう男が僕達に（というか女性陣）軽々しく声をかけた。金髪をした、軽薄そうな男だ。

「変わった制服だね。どこの学校？」

「なんだこいつは」

来ヶ谷は嘆息する。

「なんか真人みたいな奴だな」

鈴は腕を組み、そう言った。

「ふん。俺の筋肉をそんなひ弱な筋肉と一緒にするな」

「馬鹿っぽいところがそつくりだ」

「今暇？そこに『一ヒーの飲める静かな所があるんだけど』」

男は構わず続ける。

「なーに馬鹿なこといってんのよ。あんたは」

声と同時に男に『何か』が投げ付けられる。『何か』は男の頭部に直撃し、昏倒させた。その『何か』とは猪の子供だった。

「前の試合でヒット一本打てないでエラー連発してたあんたが遅刻してくるなんて良い』『身分よね」

「…くつ藤林杏…」

地面に這いつくばった男は恥々しげに咳く。

ロングヘアーの活発そうな少女 藤林杏は投げ付けたウリ坊を回収した。

「ごめんね。痛かったでしょ。ボタン」

「痛かったのは僕の方だつての…」

「なに？なんか文句ある？」

倒れている男の頭部に杏は足をあて、ドリルのように回転を加えつつ踏み付ける。

「いえ…。なにもありません」

僕達はその光景を呆気に取られたよつて見ていた。

「あの…。」れどりや

「ふえ？ 私に？」

この学校の生徒だろうか。小学生と見間違えかねない小柄な少女が小毬に木彫りの彫刻を渡した。

「はい。どうぞ」

「わー。ありがとう。かわいいお星様だねー」

「いえ。ヒトデです」

「ふえ…ヒ、ヒトデ…」

小毬は目を丸くした。

少女は小毬の髪飾りを注視し、

「…あなたのは髪についているのはヒトデですか？」

「ふえ？」

「とてもかわいいです！」

「え？ えー！」

小毬は困ったような声を上げる。

「ヒトデじゃないんですか？」

「え。あー。ヒトデかな」

小毬は苦笑しながら答えた。

「あなたにもどうぞ」

「あたしか？」

少女は鈴にヒトデを渡す。

「はい。どうぞ」

「うん。ありがとな」

「えー！ あたしはないの？」

と、葉留香。

「欲しいんですか？」

「うん、だつて、手裏剣みたいで投げて遊ぶと面白そうじやん」

「岡崎さんみたいなこと言わないでください。最悪です」

「え？ だつてそれ手裏剣じゃないの？」

「正真正銘のヒトドリです」

「…正真正銘のヒトドリは海にいるものですよ」

そう美魚は指摘した。

「とにかく、風子が心を込めて作つたんです。大切にしてください」

よく見ると風子とこの少女の手は包帯でぐるぐる巻かれている。木を彫る時、誤つて手を傷つけたのだろう。

「えー。けどヒトドリって海にいるあの気持ち悪いやつでしょ」「そんなことありません。とても可愛いでしょ」

言つて、手に持つているヒトドリの彫刻を胸に当つた。

「うう。胸に当つて抱きしめると…」

すると、少女 風子は『まあ』と恍惚とした表情をしたまま、どうか遠い世界に飛び立つてしまつた。

「……もしもし？ やつぼー？ 生きてますかー？」

葉留佳は風子の顔の前を手で仰いでみた。しかし、風子は反応しない。

「よし。つねつてみよう」

「よしなよ。葉留佳さん」

「いいじやん、理樹君。気づくつて普通」

葉留佳は僕の制止も聞かず、風子の顔を軽くつねつた。が、反応がない。

「もしや。ほんとに死んでる？」

「けど、息はしてるよ」

風子の鼻先から、確かに呼吸を感じられた。

「ほんとだ。よし、じゃあ、クド公ー！」

「はい。なんでしょ？」「

葉留佳はクドを指名した。

「つむ。この子にクド家に伝わる秘技を披露してくれたまえ」

「ええ？ こいんですか？」

「 もちろん 」

葉留佳は力強く頷いた。

「 では。こちよこちよこちよ 」

クドは風子の体をくすぐりはじめた。しかし、風子は無反応なままだった。

「 ……ダメです。ぜんぜん通じません 」

クドは諦め、くすぐりをやめた。

「 なにいー？ クド家四千年の歴史はその程度かあー？」

「 すみません 」

クドは涙田で葉留佳に謝る。

「 いじつなつたら、いじつするしかない 」

葉留佳はマイクセットを取り出した。

「 はるちん特製マイク 」

言つて、葉留佳は風子に『はるちん特製マイク』をし始めた。

「 やめなつて。葉留佳さん 」

「 止めないで理樹君。マイクアーティストとして、これだけはやり遂げないといけないのー 」

結局、僕は葉留佳さんを止めることが出来なかつた。

「 はい。きれいにしましうね。まずはげじげじ眉毛から 」
マイクセシットから油性のマジックペンを取り出し、風子の眉をげじげじ虫のように、描いていく。葉留佳さんは描きながら、自分で爆笑している。風子は依然、無反応だ。

「 次は、鼻の下 」

続いて、風子の鼻の下に、まるで鼻毛が飛び出でるかのよつて、巧妙に細工をする。

「 くちびるもかわいくしましょーね 」

風子の口の周りを、口紅であるの近くまで塗る。まるで口裂け女のようだ。

「 どんどんHスカレートしてーく 」

ついには、形容しがたい容姿になつた。

「あいや。これは男か女か判断できないね」

葉留佳は自分の作品をそう形容した。

「というか、顔だけじゃ人か判別できないよ」

僕はそう告げた。

「やつぱり？」

葉留佳は悪びれた笑みを浮かべた。

「……とこなわけで、とってもヒートデは可愛いのです」

突如、風子の意識が戻った。というか、彼女の時間が再び動き出したような感じだ。

「あれ？ どうなさいましたか？」

「はい。これ」

葉留佳は風子の前に化粧用の鏡を差し出した。

「……どちら様ですか？ とても怖いです」

風子は鏡の中の、形容しがたい自分の顔を見て、萎縮した。

「……なんて恐ろしい顔でしうか。 とても人間とは思えません。 いつたい、この可哀相なお顔の方は、どこの誰なのでしうか？」

風子の疑問に、葉留佳は、風子に指を指す。

「？」

風子は疑問符を浮かべながら、鏡をよく眺める。

顔を右にしたり、左にしたり、髪を揺らしてみたりし、マジマジと鏡を眺めた。

「これ？ もしかして、風子ですか？」

葉留佳は冷や汗を流しながら、こくこく頷いた。

風子は形容しがたい顔を歪ませ、踵を返し、歩き出した。

「岡崎さん！」

風子は岡崎の前で止まつた。

背の高い、少し悪ぶれた印象の少年だった。

岡崎はそ知らぬ顔で、その場を去るひつとする。

「知らない人のふりをしないでください」

風子は岡崎の手を掴み、引き止めた。

「岡崎さんですよね？」

「……何のことだ？知らないな」

岡崎は目を合わせないようにしている。別に罪悪感があるわけではなく（犯人ではないのだから当然だが）風子の顔が見るに耐えないからだらう。

「とほけないで下さい。風子をこんな人外魔境な顔にしたことです」

「……もしかして、風子か？」

「もしかしてじやなくて、正真正銘の伊吹風子です」

風子はそう主張する。

「しかし、顔が違うぞ」

「それは、岡崎さんがこんな顔にしたからです」

風子の形容しがたい顔は涙目になつていてるよつだ。

「こんな顔では、もうお嫁に行けません。責任取つてください」

「いや。責任取れつてその顔で言われても。それに俺、そんなことしてないし」

「葉留佳さん」

僕は葉留佳に首を促す。

「ちえ。わかつてるよ」

葉留佳は渋々、頷き、風子の前に行く。

「ごめんね。やつたのあたし」

そう、謝罪した。

「いえ。やつたのは岡崎さんです。前にも、風子がほんの一瞬気を取られている間に、男子トイレに連れて行かれたり、鼻にストローさされたり、他にも色々されたんです。こんなことするのは岡崎さんだけです」

風子は葉留佳が眼中にないよう、岡崎を責め立てる。

「だから、俺じゃないで」

岡崎はそう否定した。風子はしばらく考え。

「……もしかして、ほんとはあなたがやつたんですか？」

そつ葉留佳に尋ねた。

「うそ。そう。全然気づかないからつこ面白くなつちやつて。ほんとじめん」

葉留佳は顔の前に手を合わせ、謝罪の意を示す。

「……最悪です。岡崎さん並に最悪な人がこの世にいるなんて、風子今まで信じられませんでした」

「だから、じう謝つてんじやん」

「謝るぐらいなら、最初からしないでください。それに、ごめんで済めば警察はいらないと、前、お姉ちゃんが言つていた気がします」

「じゃあ、どうすればいいの?」

「責任を取つてください」

葉留佳の問ひに風子はそう答えた。

「責任つて、あたし女だよ」

「それもそうですね。じゃあ、この顔を何とかしてください」

「まあ、そこら辺は抜かりないよ。ちゃんとマイク落とし持つてきましたし……あれ?」

葉留佳は自分の荷物を弄る。しばらく探してみたが、

「じめん。忘れてきたみたい」

「……最悪です。風子にこの顔のまま残りの人生を歩めとこつのでしょうか。風子の人生はお先真つ暗です。暗すぎて前が見えないくらいです」

「こんなこともあるつかと…」

声と共に突如、小毬が現れた。片手に化粧箱のような箱を持って。

「前、はるちゃんに辱めを受けてから、このマイク落としを離したことはなかつたよ」

小毬はマイク落しで風子の『はるちゃん特製マイク』を落とした。

「はい。治つたよ」

鏡で風子の顔を見せる。やはりいつも通りの風子の顔があつた。

「ありがとう」)「それました」

「どーいたしまして。それに、自分の顔にいたずらされたら悲しいもんね」

「ありがとう。小毬さん」

僕は小毬さんに礼を言った。

「つりん。理樹君。当然のこととしたまでだよ」

その当然のことを当然にできる小毬さんはすこいんだ、と僕は思つ。

「けど、風ちゃん。はるちゃんを責めないでね。悪気があつたわけじゃない」と思うんだ

小毬は風子をそう諭す。もう呼び名がちゃん付けか。小毬さんは女の子を誰でもちゃんとづけする。

「……まあ。今回はそういうことにしておきます」

風子の怒氣は収まつたのか、穏やかな表情になつた。

「それで、あなたにもこれをあげます」

風子は僕にも木彫りのヒトデを手渡した。

「僕にもくれるの?」

「はい。あなたは岡崎さんと違つて、最悪ではなさそうですから」岡崎といつのはさつきの少年のことだろひ。酷評だが、そんなに悪い人ではなさそつだが。

「ありがとう。大切にするよ」

僕はそう答えた。

「さつきはとんだ邪魔が入つたねお嬢さん方」
さつきの金髪の男が現れた。

「また貴様か」

呆れた声で来ヶ谷。

「なんだ。真人の弟か」と、鈴。

「俺に弟はいねえ」

「じゃあ、妹か」

「妹もいねえよ」

「じゃあ、あいつは誰だ?」

「鈴は男に指を指し、尋ねた。

「僕の名前は春原陽平。古河ベイカーズのトップバッターにしてキヤツチャーチームのキーマンさ

男 春原は髪をさらりとなで、ポーズを決めてそう答えた。

「つまり真人のなんだ?」

「なんでもねえよ」

鈴の問いに真人はそう答えた。

「いやあ。うちの女連中と違つて綺麗な人ばかりだ」

春原は女性陣を眺め、そう評した。

「そちらの女性も綺麗な方ばかりだと思ひますが?」

美魚はそう訊いた。

「上辺はね。けど、中身は悪魔のような奴等なんだ。智代には蹴られ、杏にはなじられ。そのくせ、モテるのは岡崎一人。もう最悪の日々だったよ」

春原という男は自身の辛い記憶を反芻し、悲しくなつてきたのか瞼に涙を浮かべる。

「……湿っぽい話をしちゃったね」

「いえ。そもそも何の話が分かりません」

美魚はそう言い切る。

「こんな男に構う必要はない。行くぞ」

来ヶ谷はそう切り出し、この場を離れようとした。

「ちょっと、待つて!」

春原は呼び止める。気を引いていたとしているのだらう。

「……お姉さん。大きいね」

「なにがだ?」

「おっぱい!」

春原は満面の笑みで言った。

瞬間。場が凍りつき、冷たい風と共に、沈黙した。
その沈黙は数秒続いた。

「何他校の生徒にちょっかい出してるんだ春原？」
その沈黙を終わらせたのは、女子生徒の声だった。

「智代！」

春原は驚いたように、声のする方角に振り返る。

智代という少女は長い髪にカチューシャをした背の高い少女だった。

「ふん。僕が何をしようが僕の勝手だろ」

「そうはいかない。生徒会に入る私としては生徒の素行を正さねばならない」

「へつ。今までは女だと思って手加減してたけど、今回は手加減しないからな」

春原は肩に力を入れ、特に型のない動物的な構えを取る。
「来るなら容赦しない」

智代という少女は毅然とした態度で春原を睨み返す。

「止めた方がいいんじゃないかな？」

僕は提案した。

「放つておけ」

来ヶ谷は諭すように言つ。

「けど」

「理樹君。君はどちらの心配をしているんだ？」

「え？」

「彼女は相当な手練だ」

「うおおおおお」

春原は雄叫びと共にがむしゃらに右拳を繰り出す。智代はステップでその拳を避け、カウンターでアッパーのよつに、春原の顎を蹴り上げる。春原の体が一瞬空中に浮く、その一瞬の間に智代は無数の

蹴りを放つた。その衝撃で春原は十数メートル吹き飛ぶ。

「うう……」

地面に叩きつけられた春原は何とか意識を保つていていた。

「まーた、なにやってんのよ。あんたたちは

春原の吹つ飛んだ先には女性がいた。

包容力のある、いかにも女性的な女性だ。

グローブをつけているので彼女もメンバーなのだろう。

「美佐枝さん！ その大きな胸で泣かせてください！」

春原は涙目で女性 美佐枝さんにがばっと飛び付くが、美佐枝さんはさつと横に避けた。春原は勢いそのまま地面に突っ込んだ。

「……なぜこうなるんだ……」

地面に伏した春原は一人呟く。

「てめえ、喧嘩うつてんのか？」

「むしろうつてこるのはお前の方だろう

春原と謙吾がいざこざをはじめた。

「そのツンツンヘア。その髪型は僕に喧嘩を売つてこるとしか思えないね」

「これは天然だ。金髪にいわれる筋合いはない」

喧嘩の原因は髪型のようだった。

「どうしよう。恭介、他所の学校の生徒だし、止めたほうがいいかな？」

僕は恭介にそう尋ねた。

「うーん。そうだな」

恭介はしばし悩み。

「その喧嘩、待つた」

恭介はその喧嘩を仲裁した。

「素手では、謙吾が強すぎる。竹刀を持つても、謙吾が強すぎる」

「どっちにしろ。僕弱いんだね」

「ここは公平に、バトルランキング制に則らうじゃないか」

「バトルランキング？」

春原が知らないのは当然だ。これは僕達、リトルバスターの仲間内だけでのルールだからだ。

僕は手短にルールを説明する。

「へー。面白そうじやん。勝つたほうが負けたほうに称号をつけるわけね」

春原は納得した。

「まあ。いいだろう」

謙吾も納得したようだ。

恭介が携帯で連絡をすると、野次馬が周囲に集まってきた。いつも思うが恭介のネットワークはすごいと思う。

「バトルスタート」

恭介が宣言した。

「僕はこいつにするよ。つてなにこれ？」

春原が選んだのは便座カバー。

「こいつにするか。うむ、いい武器だ」

謙吾が選んだのは模造刀。本物ではないが、打たれればそうとう痛い。謙吾なら尚更だ。

「なんか。すごい戦力差がない?」といふが、便座カバーでどうやって戦うの?」

「本来の使用方法で戦うこと」

恭介は告げた。

「ちょっとまつてよ!本来の使用方法つて!ねえ聞いてる?」

「かたじけのうごかる」

謙吾は言つて斬りかかった。

「無念なりー」

春原はそいつて散つた。

「そうだな。こんなのはどうだ」

春原は『語尾は常に便座カバー』の称号を得た。

「そんなんいやだあああああ

春原は絶叫した。

「あの、さつきはすみませんでした」

僕達の前に髪を結った、中学生くらいの幼い少女が現れた。ただ、
口調は丁寧で落ち着いていて、しつかりとした雰囲気である。

「ん。なんのことだ?」

鈴が尋ねる。

「私、春原芽衣つていいます」

「春原。ああ、さつきのあれか?ん。苗字が同じだな。偶然の一致
だろ?う。なにかが違う」

鈴は一人頷き納得した。

「あれは兄です」

「そうか。といつ」とはお前はあいつの妹といつわけだな
「はい。それで兄が迷惑をかけたことをお詫びに」

芽衣は頭を下げる。

「なんか、甲斐甲斐しいな。俺もいつこう妹が欲しい」

「うつさい。馬鹿兄貴」

兄は妹に罵声を浴びせられる。

「別に謝らなくていいよ。僕達迷惑してないし」

僕はそう告げる。

「本当ですか?」

芽衣は驚いたように尋ねる。

「面白いお兄さんだね」

「よく変わっているといわれます」

「馬鹿さ加減は真人と同じくらいだな」

鈴はそう評した。

「だが、筋肉は俺が勝っている」

「真人つてすぐ筋肉を価値基準に持つてくるよね」

「ふつ理樹。俺にとつて、筋肉以外のモノに価値があると思つか?」

「そんなことでえぱらないでよ」

僕は嘆息した。

「面白い人達ですね。あなた達だったら、兄も岡崎さん以外の友達ができそうです」

芽衣は微笑みながらそう言つた。

「迷惑をかけてないならいいんです。失礼しました」

芽衣はお辞儀をし、その場を去つた。

「しつかりした妹だつたな」

恭介はそう言つた。

「だが、兄貴は馬鹿だ。うちとそつくりだな」

鈴は独り言のようにそつ言つた。

「あんたは…」

恭介は知り合いなのか、長身のつなぎを着た男の前で立ち止まる。

「芳野祐助じゃないか」

「芳野祐助？」

僕は尋ねた。

「ああ。伝説的なロックシンガーだ。人気の絶頂で音楽界から身を引いた。俺に声が似てたからよく覚えている」

「…昔の話だ」

男 芳野祐助は答えた。確かに、恭介によく声が似ていた。

「なんでそのあんたが草野球に？」

「子供達の思い出を作りに」

「……そつか。今日はいい試合をしよう」

「ああ」

一人は手を握りあつた。

「…手を重ね、見つめあつ二人。悪くないと思います」

美魚は恍惚としている。

「ん。どういう意味だ？」

鈴は首を傾げた。

「お。団体様の『到着か』

サングラスにタバコを咥えた、ガラの悪いそうな男が駆け寄つて來た。

「なんだ、恭介。このガラの悪いおっさんは
真人が耳打ちする。

「聞こえてるぞ。誰がガラの悪いおっさんだ」
男は凄む。

「真人は余計なこと言わなくていいから」

僕は真人の口を塞ぐ。

「ようこそ。古河ベイカーズのホームグラウンドへ

「いらっしゃい。今回は我がリトルバスターズとの試合を承諾してい
ただき、」

恭助は軽く頭を下げる。

「あー堅苦しいのはいい。あんたがキャプテンか?」

男は打ち切り、続けた。

「いや。こっちの理樹がそうだ」

恭助は僕を前に出す。

「よろしくな。良い試合をしよう」

「よろしくお願いします」

僕達は握手をし、健闘を誓つた。

「……しかし、あんた良い体つきしてるな。あんたが投げるのか?」

恭助は男に尋ねた。

男には無駄な肉がなく、ピッチャーとして洗練された肉体を持つて
いた。

「違う違う。投げるのは俺の娘」
そういうつて男はマウンドを指した。

マウンド上では大人しそうな女の子が投球練習をしていた。

球速こそないもののちゃんとストライクコースに入っていた。
ちなみにキャッチャーをしていたのはさつきの金髪の男 春原だ。

「なんていうか。女ばかりで筋肉の足りないチームだぜ」と、真人。

「まあ。うちも同じようなもんだからね」「僕はそう言つ。

「しかし、無敗のチームだ。油断するべきではない」と、謙悟。

「渚ー！」

男に呼ばれ、マウンドから少女ー渚がこちらに来る。

「我が古河ベイカーズのエース、渚だ」

「あの、よ、よろしくお願ひします」

少女ー渚は丁寧にもお辞儀をした。

「こつちが我がリトルバスターズのエースの鈴だ」と、恭介。

「うむ。よろしくな

「は、はい」

「じゃあ、さつさとアップしてくれ。30分後に試合開始だ」
男は僕達にそう告げた。

「秋生さん。麦茶入りましたよ」

グラウンドの端に遠足用のシートを広げ、麦わら帽子を被った女性は男ー秋生というのだろうーの奥さんのようだつた。

「おー早苗。今行く」

僕達はウォーミングアップを始めた。

ランニングから始め、キャッチャボールをし、投球練習をする。

マウンドに立つた鈴は振りかぶり、ボールを投げる。

良い球だ。ちゃんとストライクに入つてゐし、手元でボールが伸び

てくる。

「鈴。ナイスボール」

言いながらボールを返球する。

「理樹」

鈴は僕に声をかける。

「頑張るぞ」

試合が始まる前、僕達は円陣を組んだ。

「理樹。お前がやつてくれ」

「え。ああ」

僕は普段使わないような、肺活量を使い、声をかける。

「しまつていくぞ」

「おー！」

得点板にはリトルバスターズと、古河ベイカーズの名前が白いチョークで書かれていた。草野球なので五回までだ。

「これより、リトルバスターズと、古河ベイカーズの試合を始めます」

審判の男はそう宣言する。ちゃんとした審判がいるようだ。

僕達選手一同は一列に整列し、対峙していた。

審判の声と共に僕達は一礼した。

後攻の僕達は各自の守備位置につく。

キヤツチヤーの僕は本壘についた。

ピッチャ―は勿論、鈴。

それぞれのポジションを言つと。

ファースト、真人。セカンド、クド。ショート来ヶ谷。サード小毬。ライト、葉留香。センター恭介。レフト謙悟。美魚はマネージャーなのでベンチにいる。

何球かの投球練習の後。

バッターがバッター・ボックスに入る。

トップバッターは春原という奴だ。

そういうえばさつき自分でいってたような。

春原は左打者らしく、左のバッター・ボックスに入った。

「ふん。 その程度の球で僕を抑えられるとでも思つてこらのかい？」

春原はこちらを挑発しているようだ。

「打てるもんなら、打つてみろ」

鈴は売り言葉に買い言葉で答えた。

「プレイボール」

審判の声が響き渡る。試合開始だ。

「行くぞ」

鈴はワインドアップの構えをし、足を高く上げた。

「真・ライジングニヤットボール」

声と共に鈴の指先から豪速球が放たれ、僕のミットに吸い込まれた。

鈴の球は走っている。捕つている僕の手が痛いくらいだ。

「ストライク！」

審判はそうコールした。

「鈴。ナイスボール」

僕はボールを返球する。

「け、けつこうやるじゃないか」

鈴の球に逃げ腰になつてゐるのか春原の声にはさつきまでの威勢はない。

これなら見せ玉はいらない。

勝負だ。鈴。

続く二球目内角高めのストレートも春原は見逃した、いや手が出なかつた。無論ストライクでツーストライク。三球目。外角低目ストレート。今日の鈴のコントロールは最初の頃には考えられないくらいに抜群だった。

春原はバットを振つた。だが、バットはボールにかすりもしなかつた。

「ストライクバッターアウト」

「くそつ」

春原はバットを投げ捨てるよつに地面に置いた。

「あんた女の子相手に三球三振?少しほ粘りなもじよ」

次のバッターの杏が軽蔑に満ちた目で言つ。

「つむさい。一打席目は様子を見たんだ。次は打つてやるさ」

杏は氣にせずバッター・ボックスに入る。

僕は鈴に変化球を要求した。鈴には多彩な変化球がある。それを見せて、今後のリードを有利に進めようといふ思惑があつた。

鈴は頷き、球を投げる。

外角低めにコントロールされた二ヤーブ（カーブ）だ。ストライクコースからボールになるこの球は普通打てない。

しかし杏は球に食らいつき、流し打ちをした。金属バットの甲高い乾いた音と共にボールはライトの手前に落ち、葉留香は慌てて補球するが間に合わない。記録はヒットだ。

「まつ。こんなもんよ」

杏は一塁で止まる。

普通ではないセンスだ。初めて見る変化球に反応出来るとばかりの思惑も外れた。

「鈴、ドンマイ」

僕はボールを返球する。

次のバッターは美佐枝さんだ。どことなく、打ちそつた雰囲気はある。

一塁の杏は足が速そので盗塁またはヒット&ランもあらげる。僕は鈴にクイックモーションを要求する。

鈴は頷き、投げた。

と、同時に杏が走った。やはりそつきたか。僕は素早く一塁に投げる為、腰を上げる。

しかし、美佐枝さんはバットを振つた。エンドランだ。

強烈なゴロがセカンドの方に転がる。クドは取れず、センターの恭介が捕球。しかし投げれない。杏は既に三塁に達していた。美佐枝さんは一塁でストップ。やられた、このチームは強い。

タイムを取ろうかとも思ったが止めた。

鈴の集中は切れていない。鈴は本当に強くなつた。

次のバッターは渚だ。大人しい印象の女の子なのでそんなに打ちそうな感じはしない。だが、四番を任せているだけあつてなにかあるのかかもしれない。

用心する必要はあつた。

一球目。外角真ん中ストレート。見逃した。審判はストライクをコール。

二球目、外角、ボール気味のスライニヤー（スライダー）渚はバットをへろへろのスイングで振つた。結果ストライク。ツーストライク。

三球目。低目のチョンジアップだ。

「はつ」

渚は当てた。当てたは当てたがただのピッチャー フライだ。

鈴はしつかりキャッチ。

アウト。ツーアウト。ランナーの進塁はない。

「あつ」ダメでした

渚は肩を落とし、ベンチへ戻つた。

五番バッターは智代だ。春原との格闘からもわかるように、その身体能力には目を見張るものがある。

これは注意すべき相手だ。僕は鈴にボール気味の変化球を要求した。鈴は頷き、投げた。

外角。ボール気味のスライニヤーだ。

しかし、智代は振らない。球が見えているようだ。

審判の判定はボール。小細工の通用する相手じやない。

僕は鈴にストライクコースを要求。真向勝負だ。

「ぐらえ」

鈴は振りかぶつた。

「真・ライジング＝ヤットボール」

鈴から唸りをあげる豪速球が放たれる。

この球は、制球がきかない。真ん中に近いところに来た。しかし普通は「ースの心配をする必要はない。この球は普通の人間の動体視力を超えている。

だが、智代はその球を打つた。智代の動体視力は常人の枠を超えていた。

智代の打つた球はセンターの恭介の手前で落ちる。恭介捕球し、バツクホームする。

だが、間に合わない。三塁の杏は本塁に帰還。一塁の美佐枝さんは二塁に。智代は一塁。一点取られた。

「うん。小さくてかわいいな」

一塁で智代は満足げに咳く。

「鈴…」

僕はタイムを取り、鈴に近付いた。

「どうした？ 理樹？」

鈴は平然としていた。点を取られ、多少動搖しているかと思つたが動搖はないようだ。

「いや。なんでもない。鈴の球は走つてる。自信持つていこう」
僕は本塁に戻り、構える。次のバッターは芳野祐助だ。見た目からして運動神経は良さそうだ。だが今の鈴ならいける。

鈴の投げた球は真ん中高め、コースは良くないが、伸びのあるストレート。甲高いバットの音がし、ボールは真上に上がつた。キャッチヤーの僕はその球をがつちりキャッチ。

「アウト。スリーアウトチエンジ」

審判の判定は勿論アウト。チエンジだ。

「子供達の思い出が…」

芳野祐助はうなだれた。

一回裏。僕達の攻撃だ。得点板には相手チームの得点が刻まれている。

うちの一一番バッターは鈴だ。鈴は何回かの素振りの後、バッターボックスに入り、バットを構えた。

渚はおどおどした動作の後「てい」という声と共にボールを投げた。チェンジアップだ。蠅が止まりそうな球速。反ってそれは半端に速い球より打ちづらい。鈴は見逃した。

「ストライク！」

審判のコール。

「にやにい…」

審判の判定に文句があるのか、不平を口にする。

「鈴、落ち着いて」

僕はそう言った。

「心配するな。理樹」

鈴はバットを構え直す。

二球目。

（これもチェンジアップだ（といかこれしかないようだ）渚は「えい」と言つて球を投げた。鈴は見逃した。

「ストライク！」

と審判のコール。カウントツーナッシング。後が無くなつた。
「さつきのお返しだ。君を三球三振にしとめてやる」とキヤツチャーの春原。

「お前と一緒にするな」

鈴は打席に集中する。

三球目。渚は「とう」という声と共にチェンジアップを投げた。

鈴はその球を引きつけて打つた。

キーン。

バットの音と共に二塁線に強烈なライナーが放たれた。

三塁手の美佐枝さんはボールに飛び付いた。だが、グローブに当たるだけで取れない。弾かれたボールをレフトの芳野が拾う。

鈴は一塁で止まつた。

「見たか」

一塁で鈴は小さくガツッポーズを取つた。

「次は私が」

来ヶ谷が打席に入る。

「姉御」かつとばせ「」

と、ベンチから葉留香がどこから持つて来たのか野球応援用のメガホンで。

「姉御、姉御、姉御。打て打て姉御、姉御」
リズミカルな応援だ。

「三枝さん。そこはお姉様の方がよろしいですよ」と、美魚。

「えー？ そう美魚ちん？」

「はい」

「お姉様、お姉様、がんばれ、がんばれ、お姉様」「ええい。うるさい」

来ヶ谷はバッターボックスで一人呟いた。

鈴の足は速い。俊足といつてもいいくらいだ。

ピッチャーの渚の球速から見るに、ここは盗塁をしないと勿体無い。

問題は春原の肩だが、見た目にはあまり強肩には見えない。僕は鈴に盗塁のサインを出た。

一球目。一塁の鈴はタイミングよく走つた。
「ちい！」

春原は言いながら、一塁に投げる。

思つたより肩はいいようだ。だが、球速の遅さが致命的だった。鈴は樂々一塁に達していた。

「鈴ちゃんナイス！」

と、ベンチで葉留佳。

カウントはワントストライクノーボール。

ピッチャ一、渚は投げた。

来ヶ谷は叩きつけるようにそのボールを打つ。強烈な「ロゴ」一塁と三塁の間を襲う。

しかし、杏はなんなくそれをさばいた。一塁に送球。

タイミングは際どかつたが審判の判断はアウト。

ワンナウト。一塁。

三番は謙吾だ。謙吾なら決めてくれる気がする。

初球。謙吾は見送った。

審判の判定はストライク。

「こう遅いと、返つて、打ちにくいな」

謙吾は打席で呟く。

「どうした? けんこつち。俺が代打で出てやろうつか」と、ベンチで真人。

「お前はスタメンで出てるだろ? が

呆れたような声で謙吾。

「え? スタメンだと、代打出れないの?」

真人は尋ねる。

「出れないよ」

僕はそう答えた。

僕はネクストバッターサークルに入っている。

次のバッターは僕だ。真人と謙吾が「四番は俺だ」「いいや俺だ」と喧嘩するので結局僕が四番をやることになった。

二球目。渚は球を投げた。

謙吾は片手でその球をうまく打つ。金属バットの音と共に、打球は高く上がり、球はぐんぐんと伸びていく。

「走れ。鈴!」

恭介の声と共に、鈴は走った。あの打球では捕球は不可能だ。球はセンターの深い所に落ちた。智代が球を拾う。

鈴は三塁を回っている。

智代は投げた。大遠投だ。キャッチャーの春原は捕球。
「まじかよ。ノーバウンドじゃねえか」

真人は驚き、そう言つた。

鈴は既に本塁に向かつてゐる。全力疾走だ。止まれない。
クロスプレーになる。

「へへ。アウトだよ」

ボールを持つた春原は鈴をタッチアウトにしようと本塁で待ち構える。

「じゃまだ！ どけえええ！」

鈴は叫び、跳んだ。

「え？ ・・・うあああああ

鈴は勢いそのままで、春原にとび蹴りをかました。顔面に蹴りをくらつた春原は、転がり、ボールを落とす。

鈴は本塁を踏んだ。

「やつた！ 同点だ！」

皆が歓喜をする。

春原はのびていた。不幸にも草野球でキャッチャーがプロテクターをつけていなかつたのでまともに鈴の蹴りを顔面に受けてしまった。顔には鈴の靴跡がついている。

「だいじょうぶ？」

小毬が春原に駆け寄つた。

「心配するな。春原は不死身だ」

一塁の岡崎が言つた。

「不死身じゃないやい。僕だつて死ぬわ！」

春原は復活した。

試合再開。

僕の打席だ。僕はバッター・ボックスに入る。

謙吾は一塁だ。アウトカウントはワンナウト。
チャンスだ。

僕はバットを構える。

渚は球を投げる。

僕は見送る。

「ストライク」

審判はそう判断。

実際打席に立つと、このエンジアップはタイミングを合わせるのが難しい。

智代の送球を見るに、守備にはあまり穴がなさそうだ。

二球目。渚はコントロールが良いようだ。良くストライクに入つくる。

僕はエンジアップを打つた。球は高く上がり、ライトに飛んでいった。

ライトは風子だった。風子はふらふらと歩き、「えい」と言つて目を瞑つてグローブを差し出した。

グローブにボールが入つた。

「ええ～～～～！」

捕つた本人が驚きの声を上げる。

風子は「ぱわあ」と恍惚とした表情になつた。

「謙吾！タッチアップだ」

恭介はそう謙吾に言つた。

謙吾は進塁。二塁に達した。

次のバッターは真人だ。

「いっちょ、ホームランといくか」

言いながら、真人は打席に入り、バットを構える。

一球目。

「どうらあああああ」

真人は雄叫びを上げながらバットを振る。

空振り。

一球目。

「つらあああああ

真人は雄叫びを上げ、バットを振る。

空振り。

三球目。

「つりやああああ

真人は雄叫びを上げ、バットを振る。

空振り三振。

「ストライク、バッターアウト・チョンジ！」

「今のは練習だった・・・ってことにはならねえか？」

「ならないよ」

僕は真人にそう言った。

一回の裏が終わった時点で、1対1。同点だ。

二回表、古河ベイカーズの攻撃。

僕達は各自の守備位置についた。

古河ベイカーズのバッターは芽衣。

小柄な女の子なので、そんなに打ちそうには見えない。

ここはカウントを取りにいこう。

僕は鈴にストレートのサインをする。

鈴は投げた。

暴投だ。すっぽ抜けた感じで、球が反れた。

僕は捕れず、後逸した。

幸いランナーはなかつたので、ボールをカウントしただけだ。

「手が滑った」

そう言つた鈴の顔には汗が滴つている。

初回の全力投球と、ホームへの全力疾走の影響もあるが、正午に近づき気温も上がってきたこともあるだろう。

「鈴！ロージン使って」

僕はタイムを取り、鈴にロージンバックを渡す。

鈴はロージンバックを何度か握り、地面に落とす。

僕は本塁で構え、ボールを鈴に投げ渡す。

鈴は振りかぶり、投げた。

二球目。これもストレート。

外角の高めに入った。

審判の判定はストライク。

「はう、速いです」

芽衣ちゃんには悪いがこちらも手加減するわけにはいかない。

三球目。内角高め、ストレートだ。

芽衣はバットを振った。だが完全に振り遅れだ。

バットに当たったことは当たったが、バットに掠った程度だ。

ファウルボールが後ろに飛ぶ。

殆ど球威が殺されていなかつたので、フライにならず、僕は捕れなかつた。

カウント、ツーストライク、ワンボール。

四球目。

甘い球が真ん中に入った。

キーン。

芽衣の振ったバットから快音が放たれた。

ライナーが二塁と三塁の間を襲う。

しまつた、と瞬間思つた。

が、来ヶ谷は目に見えないぐらいの速度で移動、ボールを処理し、

一塁にボールを送る。審判の判定はアウト。

「ま。こんなもんだよ。理樹君」

助かつた、と僕は思つた。

来ヶ谷さんでなければ、捕るのは不可能だつたわつ。

「アウトでしたか」

アウトになつた芽衣はとぼとぼベンチに戻る。

次のバッターは岡崎だ。

体格もよく、運動神経も良さそうだ。

慎重にいく必要はある。

とりあえず、変化球から入つてみよう。

鈴は振りかぶり、投げた。

内角低めのシンカーだ。

岡崎は見送った。

「ストライク！」

審判のコールが響く。

二球目。

鈴は、ボールを親指と小指だけで持ち、他の指は握り、リリースの瞬間弾くように投げた。

ニヤックル（ナックル）だ。

ランダムに変化し落ちるこの球は、低めに決まった。

岡崎は見送った。

「ボール」

しかし、審判の判定はボール。

少し落ちすぎたか。

「岡崎！ 振れよ！ 僕に続け！」

ベンチで春原が騒ぐ。

「お前に続いたら三振だからな」

岡崎は溜息を吐き、バットを構える。

「ふつ岡崎。一回の得点を叩き出したのを、一体、誰だと思つてゐんだい？」

「お前じやないからな」

「え？ 僕先頭打者ホームラン打つたんじやないの？」

「打つてないからな」

言つて、岡崎はバットを構えなおす。

鈴は振りかぶり、投げた。

外角、ストレートだ。

岡崎はバットを振った。だが振り遅れた。
ライトの方角へボールは飛んだが切れた。
フェールだ。

カウント。ツーストライクワンボール。
鈴は足を高く上げ、大きく振りかぶり、投げた。

「ライジングニヤットボール」
ライジングニヤットボールだ。

速いボールが僕のミットに収まった。
岡崎は振り遅れた。空振り三振だ。

「ストライク！バッターアウト！」

審判は「ホール」。

「岡崎！僕に続けよ！」

「続いたろ」

岡崎はバットを置き、ベンチに帰る。

「結局、俺達は凡退か」

芳野祐介は自嘲気味に笑う。

次のバッターは風子だ。

芽衣以上に小柄な少女だ。本当にこの学校の生徒か怪しい。
あまり警戒する必要はないだろう。

風子は金属バットが重いのか、引きずりながらバッターボックスに入る。

「このバット、重いです。玩具のバットはありませんか？」

風子は尋ねる。

プラスチックのバットは割れるんじゃないかな。

そう、僕は思った。

風子はやつとのことでバットを構える。

鈴は振りかぶり、投げた。

「ストライク！」

風子はストライクのホール一秒後ほどで、やつとバットを振れた。

完全な振り遅れだ。

鈴は一球目を投げる。当然、振り遅れでストライク。

ツーストライク。

三球目。

鈴は振りかぶった。

風子は鈴が投げるより早くバットを振った。

鈴は投げた。

タイミングが合つた。

浅いフライが、一塁手の真人の頭上を越え、グラウンドに落ちた。

葉留佳が捕球するが間に合わない。風子は一塁で止まる。

「風子、幼稚園のかけっこで一番になつたことがあります」

一塁の風子は満足げだ。

「ついに僕の出番だね」

春原は何回かの素振りの後、左の打席に入る。

僕は鈴に変化球のサインを出す。

一打席目では直球で攻めた。ここではまだ見せていない変化球で攻めてみることにした。

鈴は球を投げた。

外角、二ヤードだ。

春原はバットを振つたが、当たらなかつた。

ワンストライク。

二球目。内角のシューートだ。

春原は手が出なかつた。

審判はストライクをコール。

ツーストライク。

「男なら、正々堂々真っ向勝負しろいー」

春原は不満げに吠えた。

「あたしは女だ」

鈴は答えた。

三球目。鈴は春原の挑発に乗ったのか、ど真ん中に直球を投げた。バットの快音と共に、セカンドに強烈なゴロが転がる。

セカンドはクドだ。ボールはイレギュラーバウンスし、クドの頭に当たった。

「・・・いたいです。ベリーベリーペインです」

クドは座り込み、涙目で頭を撫でる。ボールは一塁の真人が拾つた。

「へへー..どうだ、見たか」

一塁で止まつた春原は自慢げだ。

「あんた女の子を狙い打ちするなんて最低ね」

バッター ボックスに入つた杏は軽蔑の籠つた目で言つ。

「だいじょうぶ、クーちゃん?」

三塁手 小毬が駆け寄つた。

「・・・なんとかだいじょうぶです」

「どれ、お姉さんに見せてみる」

遊撃手の来ヶ谷も駆け寄る。

「・・・来ヶ谷さん・・・ビーして服をめくるんですか?」

クドが怪訝そうに尋ねる。

「すまん。ついで。といひでクドリヤフカ君。お姉さんが胸を大きくする方法を教えてあげよう」

「どーするんですか?」

興味津々でクドは訊く。

「胸をあーしてこーして、こーしてあーするんだ」

「ふんふん。そーなんですか。わかりました」

試合再開。

ツーアウト。ランナー一塁一塁。

バッターは前の打席でヒットを打つている杏だ。

「ふふん。盗塁しようかなあ」

春原はリードをした。

「一塁、風子いるからな」と、ベンチから岡崎。

「お前靴紐、解けてるぞ」

一塁手の真人が春原の足元を見ると、靴紐が解けていた。

「あ。ほんとだ」

春原は屈んだ。

「え？ うあああああ

鈴が牽制球を投げ、真人が春原をタツチアウトにした。

「アウト。スリーアウトチエンジ」

審判のコール。

「あんた馬鹿？ 何チャンスつぶしてくれてんのよー。」

アウトになつた春原は杏に罵倒される。

「うるさいやい。僕だって好きでアウトになつたわけじゃないやい」

一回の表。古河ベイカーズの得点はなかつた。

一回の裏。僕達の攻撃だ。

「ふつ。俺の番か」

恭介は一ヒルに笑い、打席に向かつた。

先頭打者は恭介、当然ランナーはない。

理想を言えば、恭介の前にランナーを溜めておきたかった。
下位打線は女の子三人だ。

正直、あまり期待できない。

恭介は打席に入り、バットを構えた。

洗練された構えだ。

文句の付け所のない、まるで野球のお手本のような構え。

昔からそうだが、恭介は何でも出来た。

当然、野球も出来た。

恭介に指示することはなにもなさそうだな。

そう思い、僕は恭介の打席を見守った。

ピッチャー、渚は振りかぶり投げた。

チェンジアップ。

タイミングの取りづらいその球を、恭介は一球目にしてジャストミートした。

キーン！

金属バットの真芯に当たったその音は、今まで聞いたことがないほど、小粋の良い音だった。

恭介の打つたライナーは、レフト線に突き刺さった。

審判の判定はフェアだ。

恭介は墨上を疾走する。

レフト、芳野祐介がボールを取りに向かつ。

恭介は一墨を回り、二墨に向かつた。

芳野祐介はボールを拾つた。

だが、恭介は既に二墨に達していた。恭介は二墨でストップ。ツーベースだ。

「なんていうか・・・流石としか言いようがねえな」

感嘆としながら、真人。

「葉留佳さん！」

僕は次のバッターの葉留佳を呼び止める。

「なあに？理樹君」

「次の打席、バントをお願いできるかな？」

二墨上の恭介を三墨に進めた方がスクイズ、暴投で一点も取れるし、場合によってはホームスチールも可能だ。今の状況ならベターな選択だと思う。

「バントお～？あたし信用ないなあ～大きいの狙わせてよ

葉留佳は言いながら大袈裟にバットを振つてみせる。

「そこをなんとか、お願いできなかな」

「ちえ～わかつたよ。バントすればいいんでしょ。すれば。ああ～

ホームラン打ちたかつたな」

不満げに言いながら、葉留佳は打席に向かつた。

葉留佳は左利きなので、左のバッター・ボックスに入る。

渚は球を投げる。一球目。葉留佳は見送つた。

そして二球目、葉留佳はバントの構えをする。大きめにリードをしていた恭介がスタートを切り、内野陣が突つ込んできた。

「なんちつて」

言つて、葉留佳はバントをしていたバットを引いた。

バスターだ。

内野陣は完全に意表を付かれた。

これでゴロが転がつていたら、バスター・エンドランは成功していた。

だが、葉留佳が打つた打球は高く上がつた。

フライだ。

「恭介！ 戻つて！」

三塁上に達しようとしていた恭介は慌てて踵を返し、一塁に戻る。

ショート、杏はフライを取つた。

ボールをセカンドの芽衣に向かつて投げる。

恭介はヘッドスライディング。

「セーフ」

審判の判定はセーフだ。

「ひゅう。危なかつたぜ」

恭介は立ち上がつた。

ヘッドスライディングをした恭介の制服は土で汚れていた。

「ちえ、惜しかつたな」

葉留佳は泣々ベンチに戻る。

「葉留佳さん」

「はい。はい。私が悪かったですよ」

「ナイスプレー。惜しかったね」

僕はそう告げると、葉留佳は意外そうな顔をした。

「怒らないの？」

「葉留佳さんが一生懸命やつたプレーを怒るわけないよ」

「理樹君・・・」

「敵を騙すにはまず味方からつてこうしね。良い作戦だつたと思つ

よ」

「そーですね。あたしもそのつもりでしたよ」

葉留佳は照れながらベンチに戻つた。

「がんばるよ〜」

少し間の抜けた掛け声で、小毬は打席に入った。
小毬さんはバッターなのでヘルメットをしていた。

なんていうか、女の子がバット持つてヘルメット被つて打席に立つのは、似合つような、似合わないような、不思議な感じだ。

「ふ。理樹君。そのギャップを萌えといつのだよ」

来ヶ谷は僕にそう言つた。

心を読まないでください。来ヶ谷さん。

「顔に出ているんだよ、理樹君。『小毬ちゃんの打席姿最高です。次はクドのが見れるのか、ひやつしまつ。ここつはたまらねえぜ、べへへ』と」

内容は合つてゐるが、表現は明らかに間違つてゐる気がする。

ともかく、今は試合に集中だ。

小毬さんへのサインはとりあえず出していない。

恭介の足ならボテボテでも進塁できるだらうし、次のバッターはクドだ。

ツーアウトで回つてきても点になる確率は低い。

渚は振りかぶり、ボールを投げる。その動作は実にゆっくりで、傍

目には野球をしているよつには見えず、何かの演舞をしているよつにも見える。

対する小毬さんのスイングも祈祷をしているよつな、へんてこなスイングだ。

なんとなく、二人は似ている気がする。
一球目、渚の投げた球を小毬は振った。

だが、バットには当たらず、ワンストライク。
次。

渚は振りかぶり、球を投げた。

小毬はバットを振る。球を引っ掛けた。

鈍い音と共に、ボテボテの「ロゴ」が、三塁線に転がる。

「はうあ！？」

「小毬さん！走って！」

目を白黒させている僕が言うと、小毬さんは走り出した。

あまり、足は速くないようだ。運動は得意ではないのだろう。

サードの美佐枝さんは突っ込み、ボールを処理し、一塁に投げる。

「えい！」

と、同時に、小毬がヘッドスライディングをした。

女の子らしからぬ、大胆なプレーだ。

一塁、岡崎はボールをしつかりとキャッチし、一塁ベースを踏んでいた。

対して、小毬さんは、ベースの二メートルほど手前で、うつ伏せで地面に伏せていた。

判定はアウト。ツーアウトだ。

「いだかつたよ」

ベンチに戻ってきた小毬は土だらけだった。

お気に入りのセーターも、土で茶色く染まっている。

「ナイスファイト。小毬さん」

僕はそう労つた。

幸い、ボールがボテボテだったので、一塁の恭介は二塁に進塁していた。

小穂さんのプレーは無駄ではなかつた。

「私ですか」

クドがバッター・ボックスに入る。小穂もそだつたが、クドも似合つてゐるような似合つてないような、不思議な感覚だ。

来ヶ谷さんが何か言つてきそうだが、無視することにする。

クドにどうじつた指示を出すかは、迷う所だ。

恭介がホームスチールをした方が、点になる確率が高い氣もある。まあ、ここはクドを信じてみよう。

一球目、渚がボールを投げる。遅いチエンジアップだ。クドのスイングもそれに負けないくらいに遅かつた。結果、うまく噛み合つた。

キン。クドのバットからは考えられない快音が放たれた。タイミング良く、真芯に当たつたのだろう。

ライナー性の当たりは、レフトの深い所にまで届いた。

クドは走り出さず、ベンチに振り返り、尋ねた。

「あの～どちらに走るんでしたっけ？」

「なにボケかましてんのよクド公！」

葉留佳は怒声をかける。

よくよく考えれば、クドがヒットを打つのは今回が初めてなので、咄嗟のことに対応できなかつたのだろう。

その間に、恭介は本塁に達していた。

だが、まだ得点にはならない。ツーアウトだ。クドが一塁に達しなくては。

「何やつてんだ？能美？」

恭介が怪訝そうに尋ねる。

「ご飯を食べる時、箸を持つ手の方です」

美魚は冷静な声でそう言った。

「『ご飯を食べる時・・・あ。わかりました』

クドは『ご飯を食べる時のポーズをし、やつとわかったのか一塁に向かって走り出した。

だが、ボールは既に外野から一塁に届いていた。記録はレフトゴロ。スリーアウト、チエンジだ。

「はう～ずみません」

涙目でクドはベンチに帰ってきた。

「仕方ないよクド」

僕はそう声を掛ける。

まあ、今時の女の子は野球のルールもよくわからないんだろう。それによくよく考えればクドはハーフだ。野球をしない国も多い。

結局、僕達の得点はなかった。

三回表、古河ベイカーズの攻撃だ。

僕達は守備位置につく。

「僕の番だね」

春原はそういう、打席に入った。

「お前は前の回で刺されただろ」と、ベンチから岡崎。

「何いつてんだよ岡崎・・・僕がそんなことになるわけ・・・ん？」

突如、気づいたように叫ぶ。

「うあああああ

「邪魔よ。どきなさい」

杏は春原をバットでどかし、打席に入る。

前の打席でヒットを打っている杏だ。

ここは慎重に組み立てる必要がある。

まず僕は鈴にボール気味、インハイのストレートを要求した。

鈴は頷き、投げる。要求した通りの球だ。

杏は体を反らせ、球をよける。

審判の判定は当然ボール。

「ちえ、美佐枝さんだつたら死球で出塁できたのにな

春原はベンチでそう洩らした。

「どういう意味よ？」

美佐枝さんは怪訝そうに尋ねる。

「はは。だつて、美佐枝さんはおっぱいが大きいから

春原は軽薄に笑い、答えた。

春原がひどい目に会わされているが、特に気にしないことにしよう。

カウント、ワンボール。

見せ球はこれで十分だ。

僕は鈴にストライクを要求。球種はスライーヤー。

鈴は振りかぶり、投げる。

内角高め。さつきと同じコース。

杏はさつきのインハイへのストレートが脳裏に植えつけられているのか、とつさに身を逸らす。

だが、ボールは真横に曲がり、ストライクコースに入った。

「ストライク！」

審判の判定が響き渡る。

「鈴。ナイスボール！」

僕はボールを鈴に投げ渡す。

「やるわね・・・

いいながら、杏はバットを握りなおす。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

コースは内角ボール気味、球種はストレート。

杏はスライニヤーだと思ったのか、手を出した。

バットの鈍い音と共に、サードにボテボテのゴロが転がる。

杏は舌打ちしながら走り出す。

「小毬さん！」

僕は叫ぶ。

小毬さんはボールに突っ込み、素手でボールを掴み、一塁に投げる。

「アウト！」

判定は際どかつたがアウトだつたようだ。

「がんばつたよお！」

と、サードの小毬。

次のバッターは美佐枝さん。

春原相手にムキになつていたのか、肩で息をしながら、バッターボックスに入った。

「美佐枝さん！美佐枝さんのおっぱいぐらい大きな当たりを頼むよ！」

ベンチから、セクハラとしか思えない春原の応援。

「すのはら・・・後で見てなさいよ」

バットを構えた美佐枝さんは、怒りで震えていた。

しかし、大きいな。

来ヶ谷さんとどつちが大きいかな・・・。

「少年、何卑猥な妄想をしているんだ？鼻の下が伸びているぞ」と、ショートの来ヶ谷が軽蔑の眼で。

「なんでもないよ！なんでも！」

僕は慌てて否定する。

「君は純情そうに見えて、意外と助平なんだな」

この人には嘘も隠し事もできそつにない。

「まあ。理樹君も男の子ですからね。前、小毬ちゃんの着替え覗いてたし」

ライトの葉留佳が、異様に前進してきてそつ言つた。

「けど、あれは事故だよ」

サードの小毬は弁論。

「えー、けど理樹君、小毬ちゃんのパンツ食い入るよつ見てたよ。ちゃんと柄まで憶えてたし」

「私もこの前、直枝さんに押し倒されました」と、ベンチから美魚。いつも通りの落ち着いた声だが、軽蔑の念が籠っている。

「あれも事故で・・・」

僕は釈明した。

女性陣が軽蔑の目で見る。

僕の立場が悪くなつていく。

「皆、今は試合中だよ。守備位置に戻つて」

僕はそう切り出した。女性陣は渋々引き下がる。

話を試合に戻そう。

ワンナウトランナーなし。

バッターは三番の美佐枝さん。春原に心を乱されたのか、心ここにあらずという感じで打席に集中していなつだ。

僕は鈴にストライクを要求。

甘めの直球だ。

だが、美佐枝さんはそのボールを見逃した。

審判の判定はストライク。

二球目。外角の二ヤーブだ。

美佐枝さんはバットを振つた。だがスイングに切れがない。

ボールは高く上がり、セカンドのクドがボールをキャッチした。

「わふー。やりました。初めてボールが取れました」

クドは歓喜した。ツーアウトだ。

「どうしたんだよ美佐枝さん！ 美佐枝さんのおっぱいはそんなもんじゃないだろ！」

ベンチに帰ってきた美佐枝さんに、春原はそう叱咤した。

「すのはらー」

「どうしたの？ 美佐枝さん。そんな顔するとしわが増えるよ

ふちという美佐枝さんの何かが切れた音と共に、春原は悲鳴を上げた。

古河ベイカーズの四番は渚だ。

前の打席から見るに、四番というのはただのお飾りで（僕もそうだけど）実力的にはたかが知れていた。

鈴は振りかぶり、投げた。内角のストレートだ。

渚は引っ掛けた。

ボテボテのピツチャーゴロだ。鈴はそのボールをグローブで掴み、一塁に投げた。

が、暴投だ。

ボールは背の高い一塁の真人を超え、ボールはグラウンドの隅まで転がる。

記録はエラーだ。

フィールディングの良い鈴にしては珍しい。どこか具合でも悪いのかな。

僕はタイムを取り、鈴に近づいた。

「どうしたの鈴、大丈夫？」

「なんでもない。あたしだって、ミスることもある

鈴はかぶりをふり、否定した。

「なら、いいけど・・・」

時刻は既に正午を回っている。気温も上がり、鈴のスタミナが心配な所だ。

僕は本塁に戻り、キャッチチャーミットを構える。

五番は、智代だ。

ランナーは一塁にエラーで出塁した渚。

理想を言えば、智代の前にランナーを出したくなかった。

智代の身体能力は群を抜いている。一打席目の当たりも、真・ライジングニヤットボール

でなければ、スタンドに運ばれていたかもしれない。

ランナーは一塁にいる。

敬遠はあまりしたくはない。

それに、それは鈴の性格に合わないだろう。
とにかく、勝負するしかない。

僕はミットを構えた。

一打席目は打たれた。だが、今度は抑える。

鈴は足を高く上げ、振りかぶり、投げた。

勢いのあるストレートが外角に決まる。

智代はバットを振った。相変わらず鋭いスイングだ。

打ったボールはライト線を切れ、ファールボール。

二球目、内角シューート。

智代はバットを振った。少し詰ましたが、伸びのある打球はレフト線を切れ、ファールになつた。

三球目。見せ球はなしだ。

鈴は足を高く上げた。

「真・ライジングニヤツトボール」

声と共に、鈴の右腕から剛速球が投げ込まれる。

智代はバットを振った。タイミングは合つている。

金属バットの高い音と共に、ランナーの打球が鈴を襲う。
危ない。

瞬間、僕は思った。

が、ボールは乾いた音と共に、鈴のグローブに納まった。
ボールを取った鈴は、グラウンドにへたれこんだ。

「鈴、どうしたの？ 立てる？」

「ああ。大丈夫だ。理樹」

鈴は僕の手を取り、立ち上がった。

スリーアウト、チエンジ。

三回表、古河ベイカーズの攻撃は無得点に終わった。

四回表、古河ベイカーズの攻撃。

僕達は守備位置につく。

バッターは六番の芳野祐介。

僕は鈴にストライクコースに変化球を要求。

鈴は振りかぶり、投げた。

しかし、暴投だ。

すっぽ抜けたニヤーブは、外角に大きく反れ、僕のミットに収まらなかつた。

制球が乱ってきた。

炎天下での全力投球、それにより、鈴は相当疲弊しているのかもしれない。

しかし、鈴に頑張つてもうしかない。

僕達、リトルバスターズのピッチャーは鈴しかいないんだ。

僕は鈴にストライクコースにストレートを要求した。

多少甘くてもいい。

鈴の後ろには頼もしいバックがいる。

カウント。ノーストライクワンボール。

鈴は頷き、振りかぶつた。

甘めのストレートがストライクコースに入った。

キイン。

芳野祐介のバットから快音が放たれた。

ボールは外野。レフトの謙吾の手前で落ちる。

芳野祐介は一塁でストップ。

次のバッターは芽衣。

今度も僕は鈴にストライクコースにストレートを要求。

鈴は頷き、球を投げた。

芽衣は見逃した。

審判はストライクをコール。

ワンストライク。

僕はボールを返球する。

鈴はボールを受け取り、振りかぶった。

これもストレートだが、ストライクコースから大きく外れた高めの球だ。

僕は立ち上がり、何とかキャッチ。

当然ボールでワンストライク、ワンボール。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

鈴の球は明らかに球威がなくなっていた。

あまり速いとは言えないストレートは、真ん中に近いコースに入った。

芽衣はバットを振った。

キイン。

強烈なライナーがショートを襲う。

だが、来ケ谷はそれを真正面でなんなくキャッチ。

アウトだ。ランナーの進塁はない。

鈴、それでいいんだ。

僕達は、僕達だけじゃない。頼もしい仲間がいる。

次のバッターは岡崎。

今の中には、配球を組み立てるだけの余力はない。

僕はサインを出さず、ミットを構えた。

鈴、踏ん張り所だ。

鈴は頷き、ボールを投げる。

だが、ストライクには入らない。

内角、ウエストしたような、大きなボール球だ。

僕は何とかそれをキャッチ。

二球目。

鈴はボールを投げた。

今度は外角へのボール球。ボールはストライクコースを大きく外れた。

審判は当然ボールと判定。

とにかく、打たせるしかないな。

三球目。

甘いコースのストレート。

岡崎はバットを振った。

バットから快音が放たれ、ボールはショートを抜け、レフトまで達した。

謙吾はボールを捕球。

一塁ランナーの芳野祐介は一塁でストップ。

岡崎は一塁だ。

次のバッターは風子。

前回の打席はラッキーヒットだった。

このバッターは抑えなければならない。

鈴は振りかぶり、ボールを投げた。ストライクが入らず、ボールになる。

二球目。

鈴の投げた球は、真ん中に入った。

だが、風子は振り遅れ、空振り。

三球目。

鈴の投げた球は、甘いコースに入った。しかし風子のスイングは遅く、空振り。

四球目。

鈴の投げた球を風子は遅いスイングで打った。

結果、鈍い音と共に、バンプをしたような打球が転がる。

その間に一塁ランナーと一塁ランナーがスタートを切っていた。

僕は舌打ちしながらボールを拾う。

芳野祐介は既に三塁へ達しようとしていた。

僕は仕方なく、一塁に送球。

一塁はアウトだ。真人がしつかりキャッチした。

結局、進塁打となつた。

ツーアウト、一塁二塁。

バッターは春原だ。

「チャンスで回つてくるのが、ヒーローの辛い宿命だよね」春原はバットを構え、そう言つた。

鈴は振りかぶり、球を投げる。

暴投だ。ほとんどワーンバンに近いボールを、僕は後逸しないように何とかキャッチする。

審判の判定は当然のようにボール。

「もしかして、敬遠？ まあ、一塁は空いでいるからね。強打者の僕を敬遠したいって気持ちはわからないでもないけど」

春原は僕にそう言つた。

僕は答えず、ボールを返球する。

鈴の制球の乱れ具合は、疲労の域を超えている気がする。

僕はタイムを取つた。

「鈴、本当に大丈夫？」

僕は鈴に尋ねた。

「・・・・・なんのことだ？」

「疲れない？」

「これだけ投げれば、普通疲れる」

「・・・・・なんでもないんないんだ。とにかく、打たせて

いこう。きっと、みんなが何とかしてくれる」

僕はそれだけを言い、守備位置に戻り、ミットを構える。

鈴は振りかぶり、投げた。

ボール球だ。外角に大きく逸れた。

僕はなんとかキャッチし、後逸を防ぐ。

三球目。

鈴は振りかぶり、球を投げた。

今度はストライクコースに入った。

春原はバットを振つた。

快活な音と共に、ボールはライト線に高く上がった。

「決まつたね。ホームランだ。はは」

いつた春原は走らず、ボールを見送った。

しかし、ボールは伸びず、ライトの葉留佳はフェンス間際でキャッチ。

「どうだ。見たか」

言つて、春原はダイヤモンドを一人、走り出した。

僕達はベンチに戻り始めた。

春原は一人、ホームイン。

「岡崎、見てたか？」

「ああ。お前がライトフライに倒れて一人でベースを一周した所をな」

「ええ!? 僕、ホームラン打つたんじゃないの?」

「打つてないからな」

この回、僕達はなんとか無失点で切り抜けた。

四回の裏、僕達、リトルバスターーズの攻撃だ。

得点は同点。そろそろ勝ち越したい。

打順は真人からだ。

真人は風切り音が聞こえてくらい激しい素振りをした後、打席に入つた。

渚は振りかぶり、投げた。

前回の打席で球筋を見極めたのか、真人は十分に引き付けてボールを振つた。

ボールはレフトの前に飛ぶ。芳野祐介は捕球するが、既に真人は一塁に達していた。

「惚れたかい?俺の筋肉によ」

真人は一塁で誇る。

ノーアウトランナー一塁。

「さてと。そろそろ点を取りに行くか」

ここで打順は恭介に回る。
チャンスだ。

恭介なら打つ。

恭介には常に期待に答える男だ。

渚は振りかぶり、投げた。

前回と同じ、正確無比のバッティング。

恭介はエンジアップを完璧なタイミングで捉えた。

恭介の打った打球は、センターの深い所に達した。長打だ。
真人は一塁を回り二塁へ向かう。

恭介も一塁を回り二塁へ向かつた。

まだ外野手は追いついていない。

真人が三塁を回ろうとした時。

「真人！止まれ！」

恭介は大声で真人を呼び止めた。

真人は止まる。

すると、外野からまるでレーザーガンのような返球がホームに来た。

智代だ。

恭介はこれを見計らつていたんだ。

ノーアウトランナー二、三塁。

打順は下位打線とはいえ、絶好のチャンスだ。
葉留佳が打席に入る、と。

「タイム！」

男の声がグラウンドに響いた。

秋生という、さつきのガラの悪い男だ。

「ピッチャー交代だ！」

言つて男はピッチャー・マウンドへ行く。

「よく頑張つたな。渚」

「・・・は、はい。お父さん」

渚という少女は肩で息をし、衣服を汗で濡らしていた。

この炎天下で投球を続けるのは、女子には無理があったのだろう。

女子には無理があった？

つてことは、鈴も。

「お前は早苗と一緒に休んでいろ」

「……はい」

渚はマウンドを下り、恐るべく母親であるうつ女性 早苗の所に向かつた。

「渚、お疲れ様。麦茶ですよ」

渚は早苗から紙コップに注がれた麦茶を受け取った。

「ありがとうございます。お母さん」

「春原。投球練習だ」

秋生はそのままマウンドに立ち、手にグローブをはめた。

「ついっす」

春原は体育会系っぽく答えた。

秋生はボールを握り、大きく腕を振り上げ、トルネード投法のよくな、体にねじりを加えるような独特的のフォームをとった。そして、体の力を全てをボールに集約したような、球を投げ込んだ。バシィ！

渴いたミットの音がグラウンドに響き、その場を沈黙させる。スピードガンで測れば140は軽く超えているかもしれない。プロ級といえる。

おまけにあのチョンジアップの後だ。

余計に早く見える。

恐らく、これも考えにいれた継投だったのだろう。

「やべえって、あんなの普通打てねえ」

三塁で真人は驚嘆しながら言った。

「あたしなら余計打てないよ。手加減してよ。おじさん」

打席の近くで葉留佳はそつ頼んでみた。

「嫌だ」

秋生は子供っぽく答えた。

「大人気ないなあ、もう

「次フォーキ行くぞ」

秋生はボールを指で挟み、投げた。

ほぼ直角にボールが落ち、地面でバウンスした。

春原は体でボールを止める。

「よし。そうやって体で止めりやいい」

あの球をプロテクターもなく止めるのは危険だ。

まあ・・・春原だからいいか。

「プレイボール」

審判の声が響き渡る。

秋生は独特のフォームで振りかぶり、球を投げ下ろす。

ストレートだ。ほぼ真ん中に近い所に振り下ろされたストレート。だが、葉留佳は完全に腰が引けていた。見送った。いや、見えなかつた。

見えた時には既にミットの中に入つていた。

「ストライク！」

審判のコールが響く。

「こわ・・・ちびりそう」

葉留佳は打席で震える。

この様子ではスクイズは無理だ。むしろランナーを憤死させるだけだ。

三球連続ストレート。

葉留佳は全球見送つた。

「ストライクバッターアウト！」

三球三振だつた。

「あんなの無理だよ」

葉留佳は肩を落とし、ベンチに戻つた。

「ふえ、次、わたし？」

小毬さんは尋ねた。

「そうです」

マネージャーの美魚は答えた。

「ふええええええ。怖いよおおおお」

小毬は涙目になつた。

「小毬さん。ファイトですよ」

クドは励ます。

「次、くーちゃんだよ」

「私も怖いです。アイムチキンです」

二人してガタガタ震える。

小毬さんはガタガタ震えながら打席に入った。ただ、バッタボック
スの一番離れた、バットが届きそうもない所に立つた。

当然、三球三振。

続く、クドも同様に三球三振。

三者連続三球三振。

「スリーアウトチョンジ！」

審判の声が響き渡つた。

「理樹、このままじゃまずいぞ」

守備につく前、恭介は緊迫した表情で僕に声をかけた。

「鈴の異変に気づいているか？」

「・・・・・・相当疲れているね」

僕は答えた。あの制球の乱れは異様だ。

鈴だって普通の女の子なんだ。

それを僕は鈴なら大丈夫だつて、過信して、無理な要求ばかりして
いた。

僕は馬鹿だ。パートナー失格だ。

「あの様子では、うちは延長を戦えない」

「けど・・・、僕達も向こうみたいに、恭介が投げればいいじゃないか。恭介は僕と違つて何でも出来る。恭介が投げればきっと抑えられるよ」

僕はそう恭介に訴えた。

「理樹。お前は勘違いをしている。俺はスーパーマンでもなんでもない。ただの人間だ。何でもできるわけじゃない。それに恭介は続けた。

「俺達、リトルバスターズのピッチャーは鈴だけだ」

「そうだね・・・、そうだつたよね」

何を僕は当然のこと今更気づいたんだろう。

「次の回、最終回をサヨナラで決められなかつたら、俺達の負けだ。棄権する」

「そんなん・・・」ここまで

「俺だつて妹がかわいい。これ以上無茶をさせるわけにはいかない。理樹、わかるよな？」

「・・・わかったよ恭介」

僕は頷いた。僕も、これ以上鈴に無理強いすることはできない。

「鈴、大丈夫？投げられそう？」

僕はマウンドに千鳥足で向かう鈴に尋ねた。

「・・・なんだ、理樹か。どうしたんだ。そんな心配そうな顔して」

その表情、声にはいつもの霸氣がない。

「あたしなら大丈夫だぞ」

その言葉が嘘だつて、僕にはわかる。

鈴は相当無理をしている。

けど、僕は、ただこう声をかけるしかなかつた。

「鈴。最後だ。頑張ろっ」

「・・・わかつた」

鈴は試合が始まる時と同じように、僕に言った。

「理樹、がんばるぞ」

鈴は最後のマウンドに上った。

最終回 表

古河ベイカーズの攻撃は一番の杏からだ。

「岡崎、僕の次の出番はいつだ?」

ベンチで春原は尋ねた。

「もうこないからな

「マジで? 杏!」

春原は打席に向かう杏を呼び止めた。

「僕がいくよ」

「あんたは黙つてなさい」

杏はバットで春原を殴り、黙らせ、打席に入った。

鈴にはもう余力がない。

僕は鈴の投げる球を捕るだけだ。

鈴は振りかぶり、投げた。

コントロールの定まらないストレートは、外角の高めに入った。

杏は見送った。

審判の判定はボール。

二球目、鈴は振りかぶり投げる。

その球にはもはや球威は残されていなかつた。

甘く入つたストレート。

それを杏は痛打した。

鋭いゴロが一塁と三塁を襲う。

しかし、来ケ谷はボールに飛びつき取つた。

そして一塁に送球。

「アウト!」

きわどかつたが、審判の判定はアウト。

それでいいんだ、鈴。

僕達には頼もしい仲間がいる。

三番、美佐枝さん。

僕はミットを構える。

鈴は頷き、投げた。

真ん中に近い甘い球だ。

美佐枝さんは迷うことなくバットを振った。

鋭いバットの音。

鋭い当たりはライトへ飛んだ。

「葉留佳さん！」

僕は立ち上がり叫んだ。

「はるちんダイブ」

葉留佳はボールをダイビングキャッチ。

倒れこんだ状態のまま、取ったボールを高く上げる。

アウト。

ツーアウトだ。

「ついに俺様の出番だな」

言って、秋生は打席に入った。

そうだ。渚が交代したから四番はこの人だ。

さつきの投球を見るに、きっとバッティングも並一通りではないだろう。

注意すべき人物だが、僕に出来ることはない。

僕はただ、鈴を信じ、仲間を信じることしか出来ない。

鈴は振りかぶり、投げた。

真ん中に入った甘いストレートだつたが、秋生は球筋を見極める為か、見送った。

判定はストライク。

二球目。鈴は振りかぶり、投げた。外角、大きく外れたボール球。

僕はそれをなんとかキャッチする。

三球目。ストレートが真ん中に入った。

秋生はバットを振った。

何も音は聞こえなかつた。

きつと、ほんとに真芯を喰うと、それは空振りみたいに何も音がないのかもしない。

ボールは空に消えた。誰一人、ボールを追わなかつた。

ホームランだ。

古河ベイカーズのベンチが沸く。

秋生はバットを投げ捨て、ベースをゆっくりと回り始めた。

「・・・鈴」

僕は鈴に駆け寄つた。

鈴は打たれたショックか、それとも疲労からか、俯いていた。

秋生が本塁に達しようとした時。

鈴は地面に膝をつき、倒れた。

「鈴！鈴！」

僕は鈴の名前を叫びながら、鈴を抱きかかえる。

その声を聞き、リトルバスターズの面々が駆け寄ってきた。

鈴は僕の呼びかけに答えない。

気を失つてゐる。

とにかく、ベンチに移さなければ。

僕は鈴を背負つた。

背中には、確かな感触。

鈴も成長したな。

「少年、今はえろいこと考へてゐる場合じゃないだろ」

来ヶ谷は呆れ顔で呟く。

そうだ。早く鈴をベンチに移さなくては。

「軽い日射病だな」

ベンチで鈴の様子を診た来ヶ谷はそう言つた。

「それで、どうなの？」

僕は尋ねた。

「まあ、大事には至らんが、もつ試合には出ない方がいい」

来ヶ谷はそう告げた。

「僕のせいだ。僕が鈴に無理なことを言つから。それで
「・・・なにを言つているんだ、理樹。お前のせいじゃない
ベンチで横になっている鈴は、言つた。

「鈴、気がついたの？」

僕は驚き、尋ねた。

「あたしなら平氣だ」

「嘘だ。そんなわけない。鈴は無理をしている。どうしてそんな無理をするんだよ」

「楽しかつたんだ」

鈴は答えた。

「理樹と一緒に野球をするのが。皆と一緒に野球をするのが、楽しかつたんだ。それを、あたし一人の事情でやめたくなかった」

「そんな・・・」

「理樹は、楽しくなかつたのか？」

「・・・楽しかつたよ」

「あたしは、まだ続けていたい。理樹と一緒に、野球をしたい」

「鈴。あと一球だけ投げれるか？」

恭介は鈴に訊いた。

鈴は強く頷く。

「ど真ん中に投げる。後は俺達でなんとかする」

恭介は力強くそう言つた。

何よりも頼りになる言葉だ。

「皆にお願いがあるんだ」

試合が再開する前、僕はリトルバスターズのメンバー皆に伝わるようについた。

「鈴を助けてやって欲しい

皆は、その言葉に頷いた。

鈴はマウンドに立つた。その足取りはもはやおぼつかない。

古河ベイカーズのバッターは智代。

だけど、きっと皆ならなんとかしてくれる。

鈴は、恭介に言われた通り、ど真ん中に投げた。

智代はバットを振った。

打球はセンターに飛んだ、飛距離はぐんぐんと伸びていく。
このままだとホームランになる。

しかし、恭介はそのボールを全力で追った。

そして、フェンスに足をかけ、跳んだ。

恭介のグローブにはボールが收まり、恭介はそのまま地面に落ちる。

恭介はボールを落とさなかつた。恭介は言葉通りにしてみせた。
最終回裏。

僕達、リトルバスターズは古河ベイカーズに一点リードされ、最終回の攻撃を迎えた。

前の打席はクドで終わつた。
ということは。

「鈴！」

僕は打席に向かつた鈴を呼びとめた。

「・・・理樹」

鈴は、今にも倒れそうなのに、その瞳はまっすぐに僕を見つめていた。

僕は鈴を引き止めたかつた。

これ以上鈴が無理をしたら、もしかしたら、僕は後悔することになるかもしない。

だけど、その瞳を見たら、僕はこう言つしかなかつた。

「・・・僕達には、皆が、仲間がいる。だから、鈴」

僕は、鈴に伝えた。

「僕達を信じて」

「・・・わかつた。あたしは理樹を、皆を信じる」

鈴は答えた。

その言葉を、僕は何より心強く感じた。

打席に入る前、鈴は僕に言った。

「・・・理樹、勝つぞ」

「うん。勝とう、鈴」

勝てるよ。だつて、僕達はリトルバスターズなんだから。

鈴は打席に入り、バットを構える。

僕はその姿を見守ることしか出来ない。

ただ、仲間達と一緒に。

秋生は振りかぶり、ボールを振り落とす。

伸びのあるストレートがミットに突き刺さる。

速い。

ここに来て、また一段と球速が上がった。

審判はストライクをコール。

秋生は春原が返球したボールを受け取る。

二球目。

これもまたストレートだ。内角高めに突き刺さった。

鈴は見逃した。

審判はストライクの判定。

追い込まれた。

三球目。

これもまたストレート、真ん中高めだ。

鈴はバットを振った。

力のないスイング、打つたというよりカットしたという感じだ。

ボールは真後ろに飛んだ。

ファールボール。

秋生は振りかぶり、次の球を投げる。

外角低め、ストレート。

鈴は振らなかつた。

ボール一個分程度外れていたのか。

審判はボールと判定。

秋生はボールを投げる。

鈴はバットを振る。ボールは真後ろに飛び、ファールになる。ボールが投げられる度に、鈴はバットを振り続けた。

秋生はボール球を続けて投げ、カウントはフルカウント。鈴は、投げられるボールに合わせて、バットを振り続ける。

その度に、ボールは真後ろに飛び、ファールになる。

今にも倒れそうなのに、鈴はバットを振り続けた。

僕達は、その光景を見守っていた。

そして、十何球目。

「フォアボール」

審判のコールが響く。

鈴が出塁した。

秋生は舌打ちし、僕達のベンチは沸いた。

鈴はしばし呆然としていた。

今の状況がわかっていないのかもしれない。

「鈴、フォアボールだよ」

「・・・ああ。わかった。理樹」

僕が言うと、鈴は頼りない足取りで一塁に向かった。

次のバッターは来ヶ谷だ。

「来ヶ谷さん」

僕は来ヶ谷に声をかけた。

「まあ、そう期待するな。やるだけのことはやる」

そういう残し、来ヶ谷は打席に入った。

来ヶ谷はバットを構えた。

能力から言えば、女性内で鈴と一、一を争うだらう。

秋生は振りかぶり、球を投げ込む。

球速は今までの球に比べて遅かった。

だが、ベースの直前で、ストンと落ち、ベース上でバウンスした。

フォークボールだ。

完全にストライクコースからボールコースに入っている。

流石の来ヶ谷も手が出ず、見逃した。

審判はストライクをコール。

あんなのどうやって打てつて言つんだ。

二球目、今度はストレートだ。

変化球を交えられ、球が絞れ切れていない。

来ヶ谷は見逃した。

「ストライク！」

審判は高くコール。

三球目、秋生は振りかぶり、投げた。

フォークだ。落差のあるフォーク。

来ヶ谷は前方にシフトし、フォークの落ち際を叩いた。

ボールは高く上がる。だが、高く上がつただけだ。

ショートの杏は、そのボールをキャッチした、ワンナウンドだ。

次のバッターは謙吾。

「・・・謙吾」

僕は謙吾に声をかける。

「まあ、この腕でどこまでやれるかわからんが、やつてみるわ」

言つて謙吾は打席に入った。

左腕を怪我している為、左打席に入り、まるで真剣の居合い抜きの
ように、バットを構えた。

謙吾なら、きっとやつてくれる。

秋生の初球はフォークだ。

落差のあるフォーク、それを謙吾は見逃した。

いや、見逃さざるをえなかつた。殆ど横なぎに払うだけの、あの構
えでは、フォークは打てない。

次もフォーク。ストライクだ。

謙吾は追い込まれた。

「悪い悪い。怪我人相手に打てない球投げちまつたな」と、マウンド上の秋生。

「気にするな。勝負は常に非情なものだ」

謙吾は毅然として答える。

秋生は振りかぶり投げた。

ストレートだ。

外角高め、ストライクコースに真っ直ぐがきた。

謙吾はバットを振った。いや、抜いた。

謙吾のバットからは快音が生まれ、ボールが放たれた。

あわやホームランかという当たりだった。

しかし、向かい風に推し戻され、打球はセンターの智代がキャッチ。

ツーアウトだ。

くそつ。ついてなかつた。

僕は地団駄を踏む。

四番・・・僕の打席だ。

僕はバットを持ち、打席に向かう。

あんな球が僕に打てるのか・・・。

恭介が四番なら、きっとなんとかしてくれただろう。

なんで、僕が四番なんだ。

「理樹」

恭介が僕を呼び止めた。

「・・・恭介」

「お前が決める」

「え?」

「俺に頼ろうなんて思うな」

恭介は、僕に一切の甘えを抱かせることなく、そう言い切った。

「今の鈴の様子では、走ることもままならない。だから理樹、うちが勝つにはお前が決めるしかない」

恭介は、はつきりと僕に告げた。

「鈴を救えるのは、お前だけだ」

「・・・わかつたよ。恭介」

僕は頷いた。いつだつて恭介は僕に勇気をくれた。僕の頼れる兄貴分だ。

だけど、この打席は僕にしか打てない。

誰にも譲るつもりはない。

僕は打席に立つた。

もはや一切の迷いも感情の起伏もなかつた。
無心になれたのも、恭介の言葉のおかげだ。

僕は一塁の鈴を見る。

鈴は僕を見つめていた。

鈴、僕が決める。

だから、鈴はそこで見ていて。

秋生は振りかぶり、投げた。

ストレートだ。

速い。だが、球は見えている。

僕は見逃した。

審判はストライクをコール。

秋生は返球されたボールを受け取り、次の球を投げる。

フォークだ。

落差の激しいフォークが、墨上でワンバウンドして、ミットに収まる。

ストライク。

ツーストライクだ。

追い込まれた。

だけど、僕には恐れもなにもなかつた。

仲間がいる。

恭介も、真人も、謙吾も、他にも皆がいて、鈴がいる。だから、僕に恐れるものなどなにもなかつた。

秋生は高く足を上げ、大きく振りかぶる。

そして、ボールを投げ下ろした。

ストレートだ。

恐らく、今日最速のストレート。
いつもの僕だつたら懼き、なにも出来なかつたかもしれない。
だけど、今の僕は違う。

僕はバットを振つた。今の僕には自然なスイングが出来た。
空振りをしたような感覚だつた。
手には球を打つた時の痺れもなにもなく、目はただ青い大空を見上げていた。

僕は今、なにがどうなつてゐるのかわからなかつた。
ただ、リトルバスターのメンバーの歓喜だけが、僕がホームランを打つたということを教えてくれた。

僕は一塁に向かつた。

一塁には鈴がいた。

「・・・やつたな。理樹」

「鈴もね。よくやつたよ」

僕達は互いの健闘を讃えた。

「・・・もう歩けそうにない」

鈴は気が抜けたのか、そういうつた。

「僕が鈴を支えるよ」

僕は鈴に肩を貸し、二人で歩き出した。

一人きりで周り始めた、ゆっくりと、白いダイヤモンドを。

「・・・あたし、信じてた」

「え？」

鈴の顔は僕のすぐ近くにあつた。呼吸が伝わり、体温も伝わつてくる。

「理樹なら、打つて

鈴は僕にそう伝えた。

その言葉は何もよりも嬉しかった。

僕達は三塁ベースを回った。

本塁には僕達の仲間、リトルバスターZが待ち構えていた。

「さあ、いこう、鈴。皆のところへ

「うん

鈴は明るく頷いた。

僕達が本塁を踏むと、皆が僕達をもみくちゃにした。

「やりやがったぜー。こんばんはー」

と、真人。

「リキー。かっこよかつたのです

と、クド。

「お姉さん、惚れてしまいそうだぞ」

と、来ケ谷。

「やれやれ。今日の主役は理樹にとられたな

と、謙吾。

「鈴ちゃんもかっこよかつたよー」

と、小毬。

「直枝さん。ガラにもなくかっこつすぎです

と、美魚。

「もう!」一人ともサイゴー

と、葉留佳。

そして。

「・・・恭介」

「やつたな。理樹」

僕達はそう言って、ハイタッチをした。

「まつたく。やられたぜ」

マウンドを降りてきた、秋生は悔しそうにそう言った。

「あんた、名前は？」

秋生は僕にそう尋ねた。

僕は答えた。

「・・・直枝理樹」

「あんたは？」

「棗鈴だ」

鈴は答えた。

「覚えとくぜ」

秋生はそう言い残し、その場を去った。

試合は3対2、僕達リトルバスターズのサヨナラ勝ちに終わった。
僕達は勝ったんだ。

「鈴、もっと右に寄せ。真人、お前はもっと屈め」
恭介の提案で、僕達は記念写真を撮ることにした。

僕達、リトルバスターズのメンバーは一列に並ぶ。僕の横には鈴が
いた。

恭介はカメラを手に、僕達をカメラ越しに見ていた。

「せっかくだから、恭介も入ってよ」

僕はそう恭介に提案した。

「そうだな・・・あ！あんた」

「・・・僕？・・・僕に何の用？」

恭介は近くにいた春原を呼び止めた。

「写真を撮つてくれないか？」

「えー？何で僕が」

春原は不満を洩らす。

「撮つてあげなさいよ。春原」

と、美佐枝さん。

「ちえ。わかつたよ

春原は渋々頷いた。

「ピント合わせてシャッター切れればいいから」

恭介は春原にカメラを渡し、僕の横に来た。

僕の横には鈴と、恭介がいる。

「じゃあ、もういい。いくよ？」

「あー風ちゃん」

春原の声を、小毬は遮つた。

近くに風子がいたようだ。

「なんですか？風子はとつても忙しいんです」

「一緒に写真に入らない？」

「・・・そうですね。せっかくですから」一緒にしましょう

風子が列に加わった。

「智ちゃんもどうですか？」

「智ちゃん？私のことか？」

智代は尋ねた。

「はい。一緒に入りませんか？」

「そうだな。いいだろ？」「

智代も列に加わった。

「杏ちゃんもどうですか？」

「あたし。うーん。そーねー。まあ、せっかくだから

杏も列に加わる。

「祐介さんもどうぞ」

「俺か。まあ、いいだろ？」「

芳野祐介も列に加わった。

「岡崎さんもどうぞ」

「ああ。そうだな」

岡崎も列に加わった。

「美佐枝さんも入ってください」

「まあ、そうね。入りましょうか」

美佐枝も列に加わった。

「芽衣ちゃんも入つてください」

「私もですか。いいんですか？」

芽衣も列に加わった。

「渚ちゃんもどうぞ」

「私ですか・・・その、よろしくお願ひします」

「渚が入るなら、私も一緒に」

「なら、俺もだ」

渚一家も列に加わった。

結局、一列ではおさまり切らず、前列と後列に分け、前列の人は中腰か、しゃがんで貰うことになった。

「なんなんだろう。この疎外感は」

春原は一人呟く。

「春原、もういいよ」

僕はそういった。

「・・・じゃあ。はい、チーズ」

春原はシャッターを押した。

こうして、僕達リトルバスターZと古河ベイカーズの記念写真が完成した。

「ち。無敗だつた俺の古河ベイカーズに土がついちました」

秋生はそう呟いた。

「無敗だつたつて、あんた等今まで何回戦つたんだ？」

恭介は訊いた。

「あー。前に一回

つまり、勝率五割。

「次は負けねえぞ」

「こつちこそ。いつでも受けてたつぜ」

秋生と恭介は、腕相撲をするかのように、強く手を握り合つた。

「やめとけつて春原」

「なんでだよ岡崎。これから僕がモテないのは、僕の周りにいる女に見る目がなじつてことを証明しにいくつてのこ」

「見る目があるから、お前はモテないんだよ」

「はは。岡崎。それじゃまるで僕がほんとにモテないみたいじゃないか」

春原と岡崎が、なにかやつている。岡崎が春原を止めよつとしているようだ。

「これから僕がリトルバスターズの女の子を『デート』に誘う。岡崎、見ててくれよ」

春原は言つて、リトルバスターズの女子の所に向かつた。

「美魚ちゃん」

春原は美魚の前で止まり、軽薄な笑みを見せる。

「嫌です」

美魚は即答した。

春原は数秒硬直したよつに止まつた。

「まだ・・・なにもいつてないんですけど」

「では、最後まで言つてください」

「僕と『デート』してよ」

「嫌です」

「クドリヤフカちゃん」

春原はクドの前で止まつた。

「はい。なんじょう?」

「これから僕と『デート』しにいかない?」

春原は軽薄な笑みを浮かべ、誘つ。

「けど、私には餌を待つに一匹の犬がいるので」

「そんなワン公放つといついいから、僕と」

春原がクドを強引に誘うとした時。

がぶ。

「あれ、なんか僕かまれたよ僕。がぶつて……。つていてええええ」

春原は絶叫し、走り出した。

「ストレルカ、ヴェルカ。迎えに来てくれたのですか」

春原の逃げ出した後には、一匹の番犬がいた。

「ねえ。ゆいねえ。僕と『テート』してよ」

春原は来ヶ谷をそう誘った。

「ほう。私のどじが魅力的だ? いってみる?」

「やつぱり」

春原は一瞬悩んだように間を置き、答えた。

「おっぱいかな」

「死ね」

それだけを言い残し、来ヶ谷はその場を後にした。

「葉留佳ちゃん。僕と『テート』してよ」

春原は葉留佳を誘った。

「いいですよ」

「やつた、ほんと? 待ち合わせはいつ?」

「三万年後」

葉留佳は言い残し、その場を後にする。

「三万年後かあ・・・僕、今から待ちきれないよ」

春原はわくわくしたような表情でいい、しばらく後で突如気づき、叫んだ。

「僕死んでるよ…」

「小毬ちゃん。僕と、『テート』しない?」

春原は小毬に尋ねた。

「うーん。けど、私これからおじこちあんとおばあちあんのお世話

があるの

「そんな死に損ない放つといでいいからぞ。僕と一緒に」

「春原君」

小毬は怒ったように語調を強めた。

「お年寄りは敬わなくちゃいけないんだよ！」

「はは・・・、そうだよね。お年寄りは敬わなくちゃいけないよね」

春原は氣圧されたように弱く答えた。

「鈴ちゃん、僕とデートしない？」

春原は鈴を誘つた。

「ん。デートってなんだ？」

「デートってのは、好きな人とお茶したり、映画館いつたり

「あー。あれな。それで、ビリしてあたしとお前がデートすることになるんだ？」

「ほら。僕達一緒に野球をした仲じやん。僕のクールなプレイに惚れちゃつたりしない？」

「ないな」

鈴はきつぱりと答えた。

「くそー、いつたい僕のなにがいけないっていうんだー！」
全員にフラれた春原は地面に四つん這いになり、叫んだ。
デリカシーのなさじやないかな。

「それはな。筋肉だ」

真人は答えた。

「筋肉？」

春原は真人に尋ねた。

「こいつさえあれば、女なんてイチコロだ」

真人は、腕に力こぶしをつくってみせる。

「そうかあ・・・僕に足りなかつたのは筋肉だつたのか
「そうとわかれば筋トレだ。それ、筋肉！筋肉！」

「筋肉！筋肉！」

春原と真人、二人は『筋肉！筋肉！』という掛け声で筋トレを始めた。

「なんか、馬鹿同士で妙な友情が芽生えたようだな」
その光景を見ていた鈴はそう洩らした。

「鈴、もう大丈夫なの？」

僕は尋ねた。

「もうだいぶ良くなつた。理樹のおかげだ」「僕だけじゃないよ。皆のおかげだよ」「・・・今日の理樹、かつこよかつた」

鈴は呟いた。

「え？」

「なんでもない。なんでも」

鈴は頬を赤く染め、かぶりを振つた。

「理樹、ついに見つけたぞ」

野外を探索していた恭介が戻ってきた。

「お前が打つたホームランボールだ」

恭介の手には野球のボールが握られていた。

最後に僕が打つた球だ。

「ありがとう。恭介」

「これからこのボールに皆で理樹へのメッセージを書き込む。まず俺からだ」

恭介は細めのマジックペンでボールに字を書き始めた。

『やつたな、理樹 b y恭介』

「次は俺だな」

真人がボールとマジックペンを受け取る。

『人生は筋肉だ b y真人』

「次は俺か」

謙吾がボールとマジックペンを受け取る。

『今度の主役は俺だ b y謙吾』

「はいはい。次あたし！」

葉留佳がボールとマジックペンを受け取る。

『理樹君ナイス！ b yはるちゃん』

「次は私が」

来ヶ谷がボールとマジックペンを受け取る。

『よくやつたな、少年 b y来ヶ谷』

「次は私はですね」

クドがボールとマジックペンを受け取る。

『わふー。やつたのです理樹 b yクド』

「次は、わたしだね」

小毬がボールとマジックペンを受け取る。

『よくがんばりました、理樹君 b y小毬』

「今度は私はですね」

美魚がボールとマジックペンを受け取る。

『直枝さん。お疲れ様です b y美魚』

「最後に、あたしだな」

最後に、鈴がボールとマジックペンを受け取る。

『楽しかつたぞ、理樹 b y鈴』

そして、鈴がそのボールを僕に渡す。

ボールは皆の文字で真っ黒になっていた。

「・・・ありがとう。みんな、ずっと大切にするよ

不覚にも僕の瞳からは、涙が流れていた。

それから、僕達はいつもの日常に戻った。

楽しくて、皆と笑って、泣いたり怒ったり。

僕達はかけがえのない今を生きている。

僕は、部屋に皆との写真と、皆からのホームランボールを飾った。

僕は忘れない。

皆と戦ったあの試合を。

きっと。

ずっと。

いつまでも。

fin

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7837m/>

リトルバスターズvs古河ベイカーズ

2010年10月10日07時43分発行